

# 愛媛県松前町横田遺跡Ⅱ区調査報告書

平成8年（1996）1月

愛媛県伊予郡松前町教育委員会

# **愛媛県松前町横田遺跡Ⅱ区調査報告書**

平成8年（1996）1月

愛媛県伊予郡松前町教育委員会



北からみた横田遺跡II区全景

## 序 文

松前町は、西に豊かな瀬戸内海に面し、東は靈峰石鎚山を望む重信川氾濫源に開け、松山平野南部に位置し古来より海上交通の要衝として、発展して参りました。

今回、愛媛県経済農業協同組合連合会の種子センター建設に伴い、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を、松前町教育委員会が実施しました。

本調査の実施につきましては、記録的な猛暑の中、愛媛県経済農業協同組合連合会をはじめ、関係機関や地元の方々に多大なご協力をいただいたことに対し、ここに厚くお礼申し上げ調査関係各位の御苦労に感謝申し上げる次第であります。

本報告書は、皆様の御期待に十分添い得ない面もあるかと存じますが、古代文化の解明の一助に御活用いただければ幸いに存じます。併せて、今後の埋蔵文化財の保護保存について、一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年1月31日

松前町教育委員会

教育長　満　田　泰　三

## 例　　言

- 1 本報告書は愛媛県伊予郡松前町大字横田字中窪の、伊予地区カントリーエレベーター敷地内に所在した横田遺跡Ⅱ区の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、愛媛県経済農業協同組合連合会の、種子センター建設に伴うものである。
- 3 本遺跡の発掘調査は、愛媛県経済農業協同組合連合会の委託を受けて、松前町教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査期間は、平成6年7月20日から8月31日までであった。
- 5 出土遺物の洗浄並びに注記は、平成6年9月3日から10月3日までおこない、報告書の作成は平成6年10月5日から平成7年4月30日までの間におこなった。
- 6 発掘調査は、下記の調査員が担当した。

調査員 長井 数秋（伊予農業高等学校教諭、日本考古学協会会員）

西岡 信次（松山聖陵高等学校教諭）

- 7 現地での写真撮影と測量は西岡と長井がおこなった。
- 8 遺物の整理並びに遺物の写真撮影は西岡がおこなった。
- 9 遺物の実測は長井がおこなった。
- 10 発掘調査にあたっては、下記の人々の参加、協力を得た。伏して感謝の意を表したい。  
大竹浩史・鈴哲之・山田昌範・阿部敏雄・仲神綾子・金井裕司・八田孝志  
神田好仁・内山真臣・櫛所 茂・西村美代子
- 11 報告書の執筆は長井と西岡がおこない、編集は長井が担当した。
- 12 発掘調査に係る組織は下記の通りである。

松前町教育委員会

教育長	溝田泰三
社会教育課長	国田竹孝
社会教育課長補佐	井上妙一朗
社会教育係長	吉岡 義徳
社会教育主事	大政哲志・坂井清美

## 本文目次

I 序説	1
〔1〕調査に至る経緯と経過	1
〔2〕遺跡周辺の環境	1
1 遺跡の位置と周辺の自然環境	1
(1) 遺跡の位置	1
(2) 遺跡周辺の地質	2
(3) 遺跡周辺の地形	2
2 遺跡周辺の歴史環境	3
II 第一次発掘調査の概要	7
〔1〕試掘調査による出土遺物	7
〔2〕追試掘発見の遺物	9
〔3〕第一次発掘調査	12
1 河川址	12
2 河川址出土の弥生土器	13
3 2層並びに3層上部出土の須恵器	14
III 第二次発掘調査	15
〔1〕発掘調査日誌抄	15
〔2〕発掘地区の堆積層序	17
〔3〕遺構と遺物	21
1 1号河川址	21
2 井堰（しがらみ）遺構	23
3 2号河川址	24
4 導水路	24
5 1号・2号河川址内の遺物の出土状況	25
6 1号・2号河川址出土の遺物	26
(1) 須恵器	26
(2) 弥生土器	27
(3) 石器	29
(4) 井堰用杭	31
7 3号河川址	31
(1) 層序と遺構	31
(2) 3号河川址内の遺物の出土状況	35
(3) 3号河川址出土の遺物	36
① 弥生土器	36
② 石器	36
8 住居址	38
IV 総括	38

## 図 目 次

図-1. 遺跡の位置	1
図-2. 地形と遺跡の位置	2
図-3. 遺跡周辺の地形と遺跡分布図	5
図-4. 有柄式石剣（出作）	6
図-5. 横田出土の子持勾玉	7
図-6. 横田遺跡調査区位置図	8
図-7. 横田遺跡東部試掘溝出土の弥生土器実測図	9
図-8. 横田遺跡第一次調査追試掘溝出土の弥生土器実測図	10
図-9. 横田遺跡第一次調査区3号河川址平面図	13
図-10. 横田遺跡第一次調査によって出土した弥生土器実測図	14
図-11. 横田遺跡第一次調査区3号河川址出土の須恵器実測図	14
図-12. 横田遺跡II区平面図	19
図-13. 横田遺跡II区1号・2号河川址平・断面図	22
図-14. 横田遺跡II区1号河川址内の遺物の出土状況	25
図-15. 横田遺跡第二次調査区第2層中出土の須恵器実測図	27
図-16. 横田遺跡II区1号河川址出土の弥生土器実測図	28
図-17. 横田遺跡II区1号河川址出土の石器実測図(1)	29
図-18. 横田遺跡II区1号河川址出土の石器実測図(2)	30
図-19. 横田遺跡II区1号河川址井堰遺構出土の木杭実測図	31
図-20. 横田遺跡II区3号河川址平・断面図・堆積層序図	33
図-21. 横田遺跡II区3号河川址内の遺物の出土状況	35
図-22. 横田遺跡II区3号河川址出土の弥生土器実測図	36
図-23. 横田遺跡II区3号河川址出土の石器実測図(1)	37
図-24. 横田遺跡II区3号河川址出土の石器実測図(2)	37
図-25. 横田遺跡II区3号河川址平・断面図	38
図-26. 愛媛県内の縄文～古墳時代の河川址発見の遺跡	39

## 図 版 目 次

図版1. 河川址上地層の堆積状態	43
図版2. 1号河川址内出土土器・石器	44
図版3. 1号河川址内出土の井堰用杭	45
図版4. 1号・2号河川址と用水路	46
図版5. 1号用水路・2号河川址	47

図版6. 1号・2号・3号河川址	48
図版7. 3号河川址の石錐出土状況	49
図版8. 3号河川址出土の土器出土状況	50
図版9. 3号河川址 ①	51
図版10. タ ②	52
図版11. 住居址 ①	53
図版12. タ ②	54
図版13. 出土遺物	55
図版14. 1号河川址出土土器 ①	56
図版15. タ ②	57
図版16. タ ③ 1号河川址出土石器	58
図版17. 1号・3号河川址出土石器	59
図版18. 3号河川址出土石器	60
報告書抄録	61



## I 序 説

### 〔1〕調査に至る経緯と経過

平成6年12月に、愛媛県経済農業協同組合連合会が、伊予郡松前町横田に所在する伊予地区カントリーエレベーター敷地内に種子センターを建設することを決めた。当該地区は、伊予地区カントリーエレベーター建設の際、埋蔵文化財包蔵地であるため発掘調査をおこなった場所である。したがって、種子センター建設に際しても事前に発掘調査をおこない、少なくとも記録保存をする必要が生じた。そのため、愛媛県経済農業協同組合連合会は、平成6年4月に愛媛県教育委員会並びに松前町教育委員会と、記録保存のための発掘調査について協議を実施した。その結果、松前町教育委員会は愛媛県経済農業協同組合連合会から委託を受け、発掘調査を実施することになった。

発掘調査地区の面積は600m<sup>2</sup>であるが、カントリーエレベーターの建設に伴う土地造成のため、水田の表土層を除去した上に、花崗岩の風化土を1m強客土していたので、遺物包含層の深さは、隣接地域の発掘調査に比べ約1mほど深くなっていた。

なお、発掘調査は平成6年7月15日より準備作業をすすめ、調査地域の南側に東西に走行するトレンチを設定し、堆積層序の検討をおこない、7月20日から本格的調査に着手し、8月31日に現場での調査を終えた。その後、整理作業をすすめ、続いて報告書作成作業を平成7年4月までおこなった。

### 〔2〕遺跡周辺の環境

#### 1. 遺跡の位置と周辺の自然環境

##### (1) 遺跡の位置

今回、発掘調査を実施した横田(Yokota)遺跡の第二次調査地区を、便宜的に以下横田遺跡II区と呼称したい。横田遺跡II区の絶対位置は、北緯33°46'23"、東經132°43'42"の交差する周辺一帯である。行政位置は、愛媛県伊予郡松前町大字横田字中産405-1・416番地であり、垂直位置は標高6.4mである。西方の西瀬戸内海の伊豫灘までの最短距離は2.5kmである。本遺跡の南約400mにはJR四国予讃本線が走行し、伊予横田駅がある。更に南約500mには、県道伊予一川内線が東西に走行している。横田



図-1 遺跡の位置

遺跡の西部は小規模な用水路と畦が南北に走り、これが伊予市下三谷と松前町横田の境界線となつ

ている。遺跡の東200mには横田集落の産土神を祀る素鷦神社が鎮座している。

横田遺跡の第一次調査地区は南東40mの、伊予市片山遺跡は南南西100mの距離にそれぞれ分布しており、かなりの面的広がりをもった一つの遺跡である可能性が強い。

### (2) 遺跡周辺の地質

本遺跡の南約6.5kmには、中央構造線がほぼ東西に走行しており、地帯構造的には、これより以南を西南日本外帯、以北を西南日本内帯と区別している。したがって、本遺跡を中心とする松山平野南西部は、西南日本内帯に属している。中央構造線の北部には谷上山（標高445.5m）から行道山（標高403m）、金松山（標高257m）に延びる和泉層群からなる山塊が形成されている。この和泉層群は和泉砂岩と頁岩の互層からなっている。

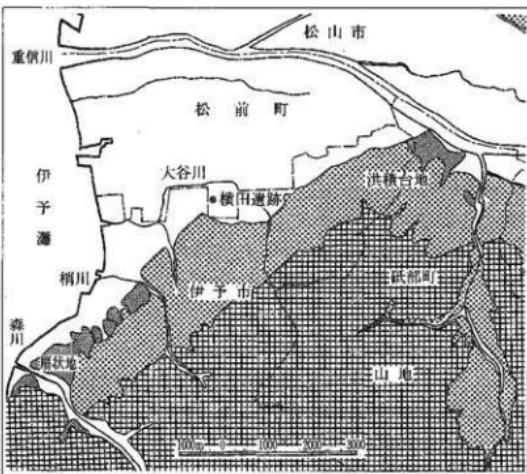


図-2 地形と遺跡の位置

遺跡の東部を北流する大谷川の最上流は、中央構造線にまで

は至っていない。そのため、大谷川の最上流部では崩落の激しい和泉層群を大きく開析し、その土砂が運搬作用によって山麓や河川周辺に厚く堆積している。本遺跡周辺の土壤は、この和泉層群中の砂岩層の風化土であり、これに頁岩の風化土が若干混入しているだけである。そのため、和泉砂岩並びに頁岩の疊以外は、他地域から人為的に搬入されたものとみなすことができる。

### (3) 遺跡周辺の地形

瀬戸内海の伊予灘に流入する重信川は、その流域に肥沃な平野を形成している。この松山平野の南西部、すなわち重信川下流左岸一帯の低湿地に松前町は位置している。松前町の南3km～5kmには、前述のごとく標高400m前後の和泉層群からなる山塊が東西に分布している。この和泉層群は一部砾岩を含んでおり、地層が比較的軟弱であるため、圧碎や傾斜の具合によって滑落が激しい。このような場所は集中豪雨等の際には土砂崩壊をおこし、鉄砲水となって下流に土砂を押し流した。

和泉層群からなる山塊の北端には、南西から北東方向に伊予断層と呼ばれる小断層が走行しているため、三角末端面が直線的に連続している。断層崖下の浸食谷の出口には、崖水や小扇状地が形成されているが、楠川以東はすべて更新世に形成された古期扇状地である。

砥部町と伊予市の境界線付近に水源を発する大谷川は、軟弱な和泉層群を開析し、渓谷に古期

扇状地を形成しながら、天井川となって北流し、伊予市平松で向きを北西にかえ、松前町横田の北を流れている。この大谷川は本遺跡の北方300mを西流しているが、この地点でも天井川となっている。大谷川は集水面積が極めて狭いため、水量是非常に少なく、山麓下に展開する古期扇状地は乏水地帯となっている。そのため大谷池をはじめとして原池、新池、客池、岩崎池などの農業用溜池が数多く構築されている。

標高7m～8mより低い沖積平野面は古期扇状地の扇端となっており、氾濫原の低湿地へと続いている。本遺跡は、大谷川の形成した古期扇状地の扇端に近い場所に位置しているため、地下水には比較的恵まれている。そのため、少し深く発掘すると湧水が多くなる。本遺跡や本遺跡に隣接する片山遺跡などの立地も、この湧水と深く係わっているとみてよい。

本遺跡は標高6.5mの低湿地中に所在するが、西2.5kmは伊予灘となり、かつては海岸沿いに砂丘列が数列存在していた。これらから明らかのように、冬季には瀬戸内海では最も風の強く吹く地帯であった。伊予灘に面する郡中海岸は、関門海峡と対峙しており、潮流等から勘案すると、北九州と四国の海上航路の最短コースとなり、原始・古代においても北九州や東九州とは、海上交通の面で深い繋がりがあったものと想定されている。

## 2 遺跡周辺の歴史環境

松山平野南西部のうち、横田遺跡を中心とする周辺の遺跡等について触れてみたい。この地域の旧石器時代の遺跡としては、伊予市岩崎池や征露池（註1）があり、ともにナイフ形石器や尖頭器、剥片などが発見されている。この両遺跡は多くの石器と剥片が発見されているので、遺跡としてもよからう。このほか、大谷川右岸の猿ヶ谷古墳上からも角錐形石器1点と剥片が（註2）、本遺跡の南東1kmに分布する平松遺跡からも細石核が1点（註3）発見されている。特に後者は、発掘調査によって発見されたものであるが、1点だけであり、上流から洪水等で運ばれたもので、遺跡とするには無理がある。ただサヌカイト製の細石核は、松山平野では初見である。

縄文時代も自然条件には恵まれているものの、旧石器時代同様ペールに包まれ、あまり明らかでない。上三谷石橋地区の圃場整備事業に先立つ発掘調査で、若干の縄文後期の土器が発見されたが遺構の検出までには至っていない（註4）。縄文晩期になると、本遺跡の南西200mの伊予市片山遺跡から、晩期の深鉢形土器を伴う土坑が1基発見されているが（註5）これ以外の遺物、遺構はとともに未発見であるので、どのような性格をもつ遺構であったのかは明らかでない。しかし、低湿地で晩期の遺構、土器が発見されると、本遺跡周辺に大規模な遺跡の存在が想定される。土器は晩期後半のものである。このほか、松前町神崎からも縄文土器片と、大分県姫島産黒曜石の石鎌が発見されている。

弥生時代になると、多くの遺跡の分布が知られているが、正式な発掘調査が実施された遺跡は少ない。松前町内では出作宝剣田から前期の有柄式磨製石剣が発見されているが、朝鮮半島からの持ち込み品とみられるものである。出作の恵依彌二名神社東からは、後期の大型の壺が発見されている（註6）が、底部近くに土器焼成後、円孔が穿たれているので、祭祀に係るものではないかといわれている。横田遺跡の北西1.6kmの西古泉からも、前期末と後期の遺物が発見されて

いる。西古泉は標高2.3mで、地表下1mからの発見であることから、遺物包含層の標高は1.3mとなる。西古泉の西側には数十年前までは、砂丘が海岸に沿って南北に走行していたので、砂丘の後背湿地上に分布していたことになる。

細石核が発見された平松遺跡（註7）においても、あまり明瞭ではないものの、弥生中期の住居址が1棟と建造物址が3棟、弥生後期の住居址が1棟発見されている。また、本遺跡に隣接する伊予市の弥生遺跡としては、太郎丸、片山、仲組、北組遺跡などがある。このうち、太郎丸と片山遺跡（註8）は、平成4年に発掘調査が実施され、太郎丸からは弥生後期末の住居址が2棟、片山からは住居址3棟、後期の土器窯2基と土坑が若干発見されている。富田池から仲組一帯には後期の遺跡が、北組には前期前半の遺跡の分布が確認されている。

本遺跡に東接する地域は、第一次調査によって小河川に伴う後期末の祭祀遺構が発見されているが、住居址等の遺構は認められなかった。しかし、それに東接する地域は試掘の結果、前期初頭の良好な遺物が多量に発見されているので、前期の集落の立地が想定される。

平松遺跡から本遺跡並びに片山、太郎丸、仲組、北組へと続く遺跡群は、古期扇状地の扇端部に展開しており、扇端の湧水が集落成立の重要な条件になっていたようである。遺跡周辺の扇状地の扇端に沿うように分布する遺跡群は、前期と後期が中心であり、中期はあるもののその割合は少ない。これに対して中期の遺跡として顯著なものは、上三谷遺跡（註9）があるが、これは乏水地帯である古期扇状地上に分布している。さらに大谷川が松山平野に出る左岸の三谷神社東の山頂には、中期の高地性遺跡が分布している。同じ中期の高地性遺跡でも、標高400mの山頂に立地する行道山遺跡（註10）に比較すると、一段低位の高地性遺跡である。

古墳時代になると、松山平野の南西部の丘陵上には、東から猿ヶ谷、上三谷、十合の各古墳群が分布している。これら古墳群の大半は横穴式石室を内部主体とする円墳であるが、なかには箱形石棺を内部主体とする円墳もある。本遺跡の所在する松前町は、標高の最も高い徳丸東組でさえ21mで、町内全域が沼澤原ないし三角州であり、現在までのところ古墳は1基も発見されていない。本遺跡に最も近い古墳としては、東南1.2kmに伊予市上三谷古墳群（註11）が分布している。上三谷古墳群は6世紀後半から7世紀前半の後期古墳であり、そのなかには6世紀末の前方後円墳である遊塚古墳や、7世紀初頭の方墳である塙塚古墳、全長30mの客池西の前方後円墳（註12）があり、西接する嶺昌寺周辺の烟から京都椿井大塚古墳から出土した三角縁神獣鏡と同範の鏡が二面出土している（註13）。沖積平野面に分布する古墳は、前述の上三谷古墳群があるが、これ以外には本遺跡南1kmの埋積谷上の低湿地中に、二つ塚やケリヤ古墳（註14）が分布している。二つ塚やケリヤ古墳は、標高19mに分布しているので、松前町内でも東部の沖積平野面からは、将来古墳が発見される可能性も若干はあるが残存している。

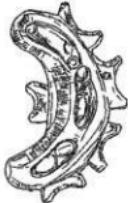
古墳時代の古墳以外の生活遺跡は、松前町内でも二・三発見されている。その一つが本遺跡の北東2.5kmに所在する出作遺跡（註15）である。出作遺跡は5世紀前半から5世紀後半にかけての祭祀を中心とする大規模な遺跡であり、夥しい土師器と須恵器、それに各種の豊富な滑石製模



図-4  
有柄式  
磨製石剣  
(出作出土)



図-3 遺跡周辺の地形と遺跡分布図



造品、祭祀用ミニチュア鉄器、鉄瓶などが発見されている。遺跡の性格は農耕儀礼に係る水靈信仰の場であるとともに、それらに従事した人々の生活の場であったようである。特に滑石の剥片や鉄瓶の出土は、この地でこれらが加工されていたことをあらわしている。その二としては、本遺跡の分布する横田から、1816年（文化13）に農民が井戸掘り中に、長さ12.9cmの滑石製の子持勾玉を発見している（註16）。現在ではその場所が横田のどこであったのかは明らかでない。

図-5 横田出土の子持勾玉

本遺跡の南西部には調査された伊予市北替地遺跡（註17）があり、古墳時代の竪穴式住居址や掘立柱建造物址、土壙墓などが発見されているし、太郎丸遺跡（註18）からは溝状遺構に伴う後期初頭の須恵器群が発見されている。5世紀においては松前町神崎、横田地区からも遺物の発見が報ぜられている。なお、北替地や太郎丸の両遺跡からは、古墳時代後期後半から末にかけての土師器や須恵器が発見されているので、中期から後期にかけて生活の場となっていたようである。中期末から後期前半の集落址とみられるものは、若干距離的に離れるが、伊予市の伊予岡丘陵北東部に、当時の中心的な集落が形成されていたようである（註19）。

歴史時代の遺跡としては、平松遺跡（註20）がある。平松では明瞭な遺構を検出するまでには至っていないが、須恵器の円面鏡や石製分銅・各種須恵器・土師器から、地方官衙ないし寺院が周辺地域に存在した可能性が指摘されている。隣接する北替地や太郎丸両遺跡からも、7世紀から8世紀にかけての遺物が発見されているので、この時期の集落が形成されていた可能性もある。

7世紀後半から8世紀前半にかけてのこのほかの遺跡としては、伊予市かわらが鼻を中心とする周辺に17基からなる瓦窯址があるが、南組窯址（註21）は5世紀後半の、三秋窯址は6世紀末から7世紀初頭の須恵器専用窯址である。更に伊予市上吾川には白鳳から天平時代にかけての上吾川古泉廃寺（註22）があり、伊予国でも最も古くから文化が開花した地域の一つであるといわれている。

（長井・西岡）

## II 第一次発掘調査の概要

第一次発掘調査の報告書は、平成4年（1992）10月に松前町教育委員会から発刊されている。第一次発掘調査のうち、第3号溝状遺構と試掘部分については、今回の第二次発掘調査に関係すると思われる所以、その概要をここに記しておきたい。また、第一次発掘調査に先立って実施した試掘調査の出土遺物も、今後の調査の参考となるとみられるので、簡単に触れたい。

### 〔1〕 試掘調査による出土遺物（図-7・1～8）

該当区域の西部にNo.1の、南部にNo.2の、東部にNo.3のそれぞれトレンチを設定して実施した。

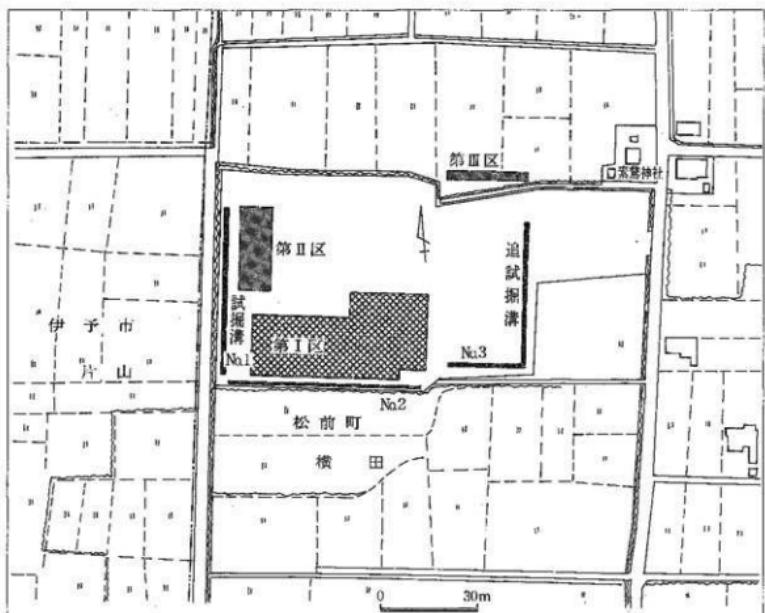


図-6 横田遺跡調査区位置図

3本のトレンチとも良好な遺物包含層と遺構とみられるものを検出したとされているが、バックホーを使用しての調査であり、確実に遺構とみられるものはNo.1トレンチの柱穴と、No.3トレンチの溝状遺構だけである。ただ、No.1トレンチで検出されたといわれる遺物包含層と、柱穴等の遺存していた部分の一部を今回調査したが、試掘で指摘されたような遺物、遺構や遺物包含層は、存在しなかったことを付言しておきたい。

No.3トレンチからは弥生前期の土器片と溝状遺構が検出されているが、第一次発掘調査でも、再びこのトレンチに接して追試掘をおこない、同じ結果が得られたとの報告がなされている。ここでは、このNo.3トレンチ出土の遺物を取り上げたい。試掘の際の層序は不明であるが、No.3トレンチから若干の弥生前期の土器片が発見されている。

1は推定口径が32cmで、口縁部は短くゆるやかに外反し、端面を丸くおさめる甕である。外・内面とも剥落が激しいが、外面に一部範研磨痕が残存している。色調は一部茶褐色である以外は淡褐色で、胎土は角のある砂粒と片岩粒を含んでいる。2は推定口径20cmで、口縁部がゆるやかに短く外反し、口縁外面は横方向に範研磨している。色調は外面が暗褐色、内面が茶褐色で、剥落が大である。胎土は1と同じである。3・4はそれぞれ甕の胴部である。3は推定最大胴径32cmで、最大胴部下に貼りつけによる段をもち、その下端に範による連続する刻み目をめぐらして

いる。4は推定最大胴径34cmで、胴部下は貼りつけによる肥厚で段となっているが、刻み目は存在しない。両者とも色調は明褐色で、胎土は石英粒、片岩粒、頁岩粒を含んでおり、剥落が激しい。5は底径7.3cmの壺の底部であるが、外・内面とも剥落が激しく、成形方法は不明である。色調は灰褐色で、胎土中には角のある微細な石英粒を多く含んでいる。6～8は鉢ないし壺の底部とみられるものであるが、いずれも平底で、外・内面とも剥落が大である。

壺は口縁部がゆるやかに外反し、口縁下に篦引き沈線文をもたず、胴部に貼りつけによる垂れ下がる段をめぐらし、なかにはそこへ篦による刻み目を施しており、松山平野南部の前期初頭の土器とみてよい。なお、胴部に貼りつけによる段と刻み目をもつ壺は、現在までのところ、松山平野では松山市朝美町美澤（註23）から発見されているだけであり、縄文晩期末の影響が強く残る第Ⅰ様式第1型式の壺である。

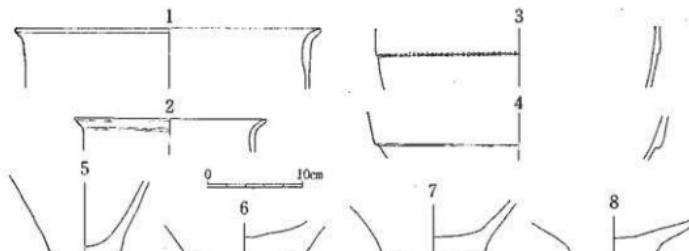


図-7 横田遺跡東部試掘溝出土の弥生土器実測図

## 〔2〕追試掘発見の遺物

追試掘によるトレンチでは、溝状遺構や土器が黒褐色土層中から検出されたといわれているが、その検出順序が明らかでない。ここではこの時に発見した土器について若干触れておきたい。出土土器の実測図は、今回のために改めて筆者が実測したものを使用した。出土土器はすべて弥生土器片であり、器形は壺と深鉢、それに壺である。

### 1. 壺（図-8・9～20）

9は推定口径20cmで、口縁部の先端がわずかに外反し、口縁下は垂直に下がっている。色調は明褐色で、外・内面とも剥落が激しいため調整は不明である。色調は明褐色で、胎土中には微細な花崗岩粒を多く含んでいる。10も推定口径20cmで、口縁部は直立し、口縁端が心もち外反ぎとなり、色調は明褐色で、両面の剥離は激しく、胎土中には角のある和泉砂岩の風化土を含んでいる。調整は不明である。11は推定口径20cmで、口縁端から1cmの間がゆるやかに外反し、上胴部は垂直的となっている。口縁下には指圧痕が顕著に残存している。色調は黒褐色で、胎土中には比較的大きな角のある石英粒を含んでいる。外面の調整痕は不明である。

12は推定口径22cmで、口縁端から1.5cmのところからゆるやかに外反し、端面はやや尖りぎみである。色調は淡褐色で、口縁部の一部が黒灰色で、外・内面とも剥離が激しく調整痕さえ不明

である。胎土中には微細な角のある花崗岩粒を含んでいる。13は推定口径21cmで、口縁部は斜めに外反し、上肩部に最大径があるものの、最大胴径よりも口径が大である。色調は灰褐色で、胎土中には微細な石英粒を多く含んでいる。外・内面は剥落が激しいため調整は不明である。14の器形は9~12と同じであるが、口唇面に連続する篦刻み目を施し、口縁下は横篦研磨している。色調は黒灰褐色で、胎土中には和泉砂岩粒と頁岩粒を多く含んでいる。

15は推定口径22cmで、口縁部が短くゆるやかに外反している。色調は黒灰色で剥落が激しく、調整は不明である。胎土中には角のある花崗岩粒を多く含んでいる。16は推定口径19cmで、口縁部は1cmから斜め曲線的に外反している。口縁下には横篦研磨の跡が残っている。色調は明褐色で、両面とも剥落が激しい。胎土中には砂岩、頁岩、石英粒を多く含んでいる。17は推定口径24cmで、口縁部は深鉢状に大きくゆるやかに外反している。両面とも剥落大であるが、外面には篦研磨痕が残っている。色調は濃明褐色で、胎土中に角のある花崗岩粒を含んでいる。18も推定口径24cmで、口縁部は上端で水平に近い状態で外反し、胴部の膨らみは認められない。色調は灰褐色で、両面とも剥落大であり、調整は不明である。胎土中には角のある微細な石英粒と頁岩粒を若干含んでいる。19は推定口径21cmで、口縁部は厚さ1cmと肥厚外反し、端面は丸くおさめている。両面とも剥落が激しく、かつ磨滅しており調整は不明である。色調は赤褐色で、胎土中には和泉砂岩と頁岩の風化土を含んでいる。20は推定口径22cmで、口縁部は短いものの急に外反し、口縁下に比較的大きな沈線文を1本めぐらしている。両面とも剥落が激しいが、外面に篦研磨痕がわずかに残存している。色調は茶褐色で、角のある微細な石英粒を若干含んでいる。

## 2. 深鉢（図-8・21~22）

21は深鉢とみられるもので、推定口径は33cmで、口縁部は大きく漏斗状に外反し、端面を丸く

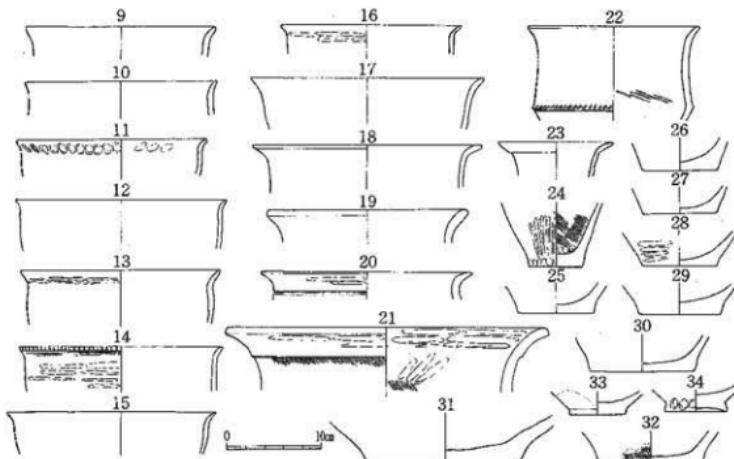


図-8 横田遺跡第一次調査追試掘溝出土の弥生土器実測図

おさめているが、器厚は1.1cmと厚く、口縁下3cmに低い稜をもっている。稜下端には櫛目が、口縁部の両面には横篦研磨痕が残っている。色調は赤褐色で、胎土中には石英粒、頁岩粒を比較的多く含んでいる。22も推定口径18cmの深鉢で、口縁部はゆるやかに外反するものの、頸部から上胴部にかけては直立ぎみで、下胴部がゆるやかな逆「く」字状に絞られている。稜をなす最大胴径には突帯があり、その上に篦による連続する刻み目をめぐらしている。両面とも剥落が激しく、調整は不明である。色調は茶褐色で、胎土中には和泉砂岩の風化土と川砂を含んでいる。恐らく、器形、施文手法からみて縄文晩期土器の影響が多分に残る土器である。

### 3. 壺(図一8・23)

23は推定口径12cmの壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、端面より1.7cmまでは肥厚し、段を有している。一見すると篦削りによる有段のようである。この壺に伴う甕は、肩部に段をもつものとみてよからう。

### 4. 土器底部(図一8・24~34)

甕ないし鉢の底部とみられるものが5個、壺の底部とみられるものが6個出土しているが、34の壺が若干の上げ底以外は、すべて平底である。

番	器種	底部	底径	底部厚	外 面	内 面	色 調	胎 土	焼 成	備 考
24	甕	平底	5.7	1.4	篦研磨と指圧	櫛目と指圧	明褐色	角のある石粒		
25	甕	平底	8.0	0.9	——	——	明褐色	和泉砂岩粒	堅牢	底面糊痕
26	甕(鉢)	平底	8.0	1.0	——	——	淡褐色	砂岩粒	堅牢	
27	甕(鉢)	平底	8.0	1.5	——	——	茶褐色	角のある石粒	堅牢	
28	甕(鉢)	平底	7.8	0.7	篦研磨	——	明褐色	角のある石粒		
29	壺	平底	8.5	1.3	——	——	灰褐色	角のある石英粒		
30	壺	平底	1.0	0.9	縦篦研磨	——	暗褐色	角のある石英粒		
31	壺	平底	6.0	1.2	——	——	赤褐色	大きな石英粒		
32	壺	平底	11.0	0.7	一部櫛	——	明褐色	石英・頁岩粒		
33	壺	平底	6.0	1.2	横篦研磨	凹凸あり	灰褐色	角のある石英粒		
34	壺(鉢)	上げ底	6.5	1.4	指圧痕	篦研磨	赤褐色	角のある石英粒		

試掘並びに追試掘によって発見した土器は、すべて弥生前期初頭のものとみて差し支えなかろう。甕は大型品もあるが、器形からすると大きく三群に分類される。その一つは、1・9~12・14で、口縁部が短く、わずかに外反し、外面は篦研磨している。なかには口唇面に篦刻み目をもつ14もあるが、同じ型式に属するものとみてよからう。試掘の甕の胴部には段をもつものや、その上に刻み目をもつものがあるが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ甕のなかには、胴部に刻み目有段のあるものがあったようである。ただ、この一群の甕の口縁部のなかには、22の深鉢に類似する口縁部も含まれている可能性が強い。

これに続くものが、第二グループの口縁部の外反がやや強くなる2や13・15~17である。口縁部が更に外反する18~20のグループがこれに続く。これらのうち口縁下に沈線文を1本もつ20以

外は、沈線文をもっていない。層位的な点が不明であるが、一括遺物とすると器形に若干の違いはあるものの、縄文晩期に近い時期の弥生前期初頭の壺とすべきであろう。特に縄文的な、下胴部に棱をもち、刻み目をめぐらす深鉢との関係から、その位置づけには大きな間違いはなかろう。21の深鉢や23の壺の口縁部の箝削り研磨による有段は、3・4の貼り付け有段と共に通している。22の下胴部に刻み目をめぐらす稜をもつ深鉢の施文手法は、3の壺の胴部の刻み目とも共通している。まとまって発見された壺のうち、口縁部が短くゆるやかに外反し、箝研磨で調整される一群は、口縁下に箝引き沈線文をもつ段階の壺に先行するグループと理解すべきであるかもしれない。これら壺のなかにも横田遺跡Ⅲ区出土の壺のように、胴部に段と刻み目をもつものがあるが、有段、有稜のある深鉢や壺が伴っており、一部には縄文晩期末の範疇に属するような深鉢が伴っている。このようなことから考えられることは、これら土器群は若干の器形に変化が認められるものの、愛媛県の第Ⅰ様式第1型式に編年的位置づけされる土器群であり、弥生前期初頭に属する土器群であるといえよう。特に深鉢等から縄文晩期終末から弥生前期初頭への移行期の土器群と理解すべきである。なお、大洲市慶雲寺Ⅰ遺跡発見の壺に同じものが認められ、慶雲寺Ⅰでは縄文晩期の深鉢と一緒に出土しており、この点でも極めて類似している（註23）。

### 〔3〕第一次発掘調査

第一次発掘調査地区の西部から、2基の不定形な土坑と溝状遺構とみられるものが2条検出されたが、あまり明瞭な遺構とはいせず、かつ、遺物も伴っていない。調査地区的西寄りの南部からは、遺構に伴わない土器群が検出されたが、そのいずれもが磨滅痕の顕著な複合口縁の壺の破片を中心とする土器片である。第一次発掘調査で明確な遺構といえるのは、調査地区的北東隅寄りで検出した河川址であろう。報告書では溝状遺構としているが、幅が1~1.5mであることや、河川址内の土砂の堆積状態などから、溝とするよりも河川址がより適切である。この河川址中からは多くの土器が出土している。

#### 1. 河川址（図-9）

河川址はE17区からH16区に向かって延び、H16区で大きく西に向かって蛇行し、I12区へと延びている。E17区とH16区の河川址の河床面の比高差は32cmで、E17区が高いことから、南から北に向かって流れていたことが判明した。この部分の河川幅は平均1.5mで、河床幅は1m前後、深さは平均して55cmであるが、場所によっては河川水の下剥作用で深くなっている。H16区の蛇行部分の北側には、大きな深さ95cmの落ち込みが形成されているが、これはE17区からH16区へ流れる河川の河床の比高差が32cmもあり、流れが早く、加えてちょうどこの部分が攻撃面に当たることから、急流による浸食作用によってできた渓谷であるとみてよい。このため、この部分だけは河川幅が3.5mと広く、かつ河床面よりもさらに40cmも深くなっている。

H16区からI12区への流れは、河床面の比高差が21cmであるので、ややゆるやかであったはずである。西流するほぼ20mの河川は、下流に相当するが、河川幅は平均1.5m、河床幅は1m前

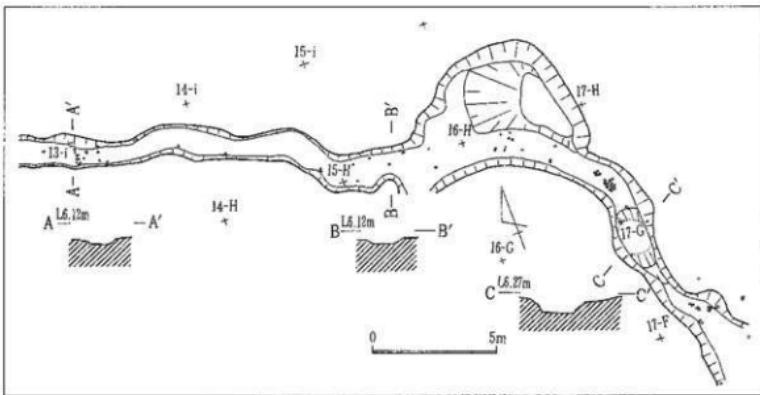


図-9 横田遺跡第一次調査区3号河川址平面図

後で、深さは30cm前後である。

河川の床面上には砂と砂礫が全面にわたって堆積していたが、これは人為的に砂礫を河床に敷き詰めた結果である。というのは、この地域はそのほとんどが粘土質土壤であり、自然の堆積状態では砂礫は認められない。第二次発掘調査の結果でも、河床面上には必ず砂礫を3~5cmの厚さで敷き詰めていたことからも明らかである。

遺物である弥生土器は、河床面近くに遺存したものもあるが、大半は河川の上面から粗密の茎はあるものの出土している。須恵器はF17区・E17区の水田床土中か、その下層の灰褐色粘土層上部からの出土であり、直接河川に関係する遺物ではない。河川に伴って出土したのは弥生後期の土器であり、そのいずれもが細片で、復元可能なものが極端に少ないとことなどから、不必要となった土器片を旧河川址上の、少し窪地となった場所に破棄したものであろう。なお、西流する河川の西端から2.6mの河床面上に、堰とみられる川石が存在したとされているが、堰であるならば、堰から水田への導水溝が存在するはずであるが、それが認められないので堰と把握することには若干の無理がある。また報告書はこの河川は人工的でないとしているが、河床の砂礫の存在から、人為的加わった河川址であることはほぼ間違いない。

## 2. 河川址出土の弥生土器（図-10・1~7）

出土した土器の大半が、河川址の上面近くに遺存していたことから、少なくとも河川掘削前時期のものではなく、河川が自然埋没するかしないかの段階の土器であることは間違いない。河川に伴って出土した弥生土器は、北流部分も西流部分も出土層位、器形、施文手法等から見る限りでは同じ時期、型式の土器であり、調査地区の西岸寄りの南部出土の土器とも時期、型式を同じくする土器群である。ここではそのうちの代表的な土器について取り上げたい。

1はH14区から、2はG16区の河川址上出土の甕である。1は推定口径17cmで、口縁部が曲線

的に外反し、端面は丸くおさめている。恐らく、口径よりも最大胴径が大きい壺とみられ薄手である。2は推定口径17cmで、口縁部が「く」字状に近い状態で外反し、口径と最大胴径が同じである。口縁部、胴部は櫛目できれいに調整している。出土する底部はすべて平底であることから、これら壺も底部は平底であろう。

3～5は壺である。3は推定口径19cm、4は推定口径17.5cmで、直立する二重口縁をもつ壺の口縁部である。拡張された二重口縁部は無文である。5は3・4の頸部から上肩部に相当するものであろう。頸部に格子目の刻み目凸帶めぐらしている。胴部が球形を呈し、小さな平底をもつ壺とみてよかろう。このほか、口縁部が逆「く」字状を呈する二重口縁の壺も出土しており、二重口縁部に櫛描きによる波状文をもつものもある。なかには頸部が長く、大きく外反し、端面を水平におさめ、頸部下が角度をもって大きく張り出し、頸部を櫛目で調整している壺も出土している。6・7は高坏である。特に6の高坏の口径は32cmで、坏底部は半球形を呈し、口縁部は逆に大きくゆるやかに外反している。坏底部と口縁部は、のちに貼り付けにより接合している。口縁部の外面は刷毛目で、内面は箒研磨、坏底部外面も箒研磨で調整している。脚柱部は欠損していて不明である。土器底部は完全な丸底ではなく、すべて大小の差はあるものの平底である。

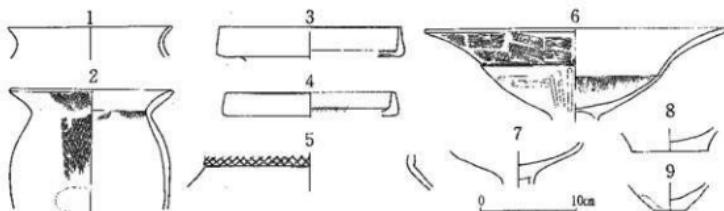


図-10 横田遺跡第一次調査によって出土した弥生土器実測図

以上、河川址に伴う弥生土器は、壺・壺・高坏等においても形態的に若干の差はあるものの、一括造物の可能性が大であり、あえて型式を分ける必要はなく、愛媛県内の第V様式第4型式に属するもので、弥生終末期の土器群とみなすことができる。ただ、出土した土器底部に丸底や尖底が認められない点や、「く」字状二重口縁に櫛描き波状文をもつものは、報告書でも指摘している通り、第V様式第3型式の可能性が強いが、一部には第V様式第3型式から第4型式への移行期の土器も存在する。したがって、河川址そのものは、それ以前、少なくとも半世紀ほどは先行するとみなすべきであろう。

### 3. 2層並びに3層上部出土の須恵器 (図-11・1～4)

第4区の2層下部は水田床土、3層上部は灰褐色粘土層であり、いずれも河川址には直接関係のない地層からの発見である。これは第二次発掘調査区、すなわちII区の

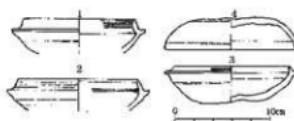


図-11 横田一次調査3号河川址（E17区、F17区）出土の須恵器実測図

須恵器出土の状況と同じであり、遺構に伴ったものではない。

1は坏身で、E17区の3層の黒褐色粘性土層中からの出土であり、口径12cm、受部径14.2cm、立ち上がりは0.7cmで、曲線的に内反している。色調は青灰色で堅緻である。2・3も坏身で、ともにF17区の水田床面中からの出土であり、遺構に伴ったものではない。2は口径13cm、受部径15cm、立ち上がり1.2cmで、立ち上がりは斜め直線的に内反している。3は口径12cm、受部径14.2cm、立ち上がり0.6cmで、立ち上がりは内反している。底部は焼成の際に歪み產生している。2・3とも青灰色を呈し堅緻である。4はE17区の蓋坏の蓋で、口径14cm、高さ3.4cmで、天井部はやや窪みがある。端面は丸くおさめている。恐らく、E17区出土の1の坏身とセットとなるものであろう。これら須恵器のうち、坏身は受部の形態にそれぞれ違いが認められる。形態的な変遷からみると、1・2→3となるが、出土状態が不安定であり、これだけで型式を分けることは困難である。ここでは1・2をⅡ期4型式、3をⅢ期1型式に属する可能性を指摘するに留めたい。

ただ、須恵器は表土層の耕作土下の水田床土中やその下部からの出土で、遺構や遺物包含層からの発見ではない。恐らく、古墳時代後半の遺跡が近くに存在し、それが何んらかの関係で混入したのではないかとみられる。第二次発掘調査でも同じ傾向が認められているので、隣接する西部の伊予市片山や太郎丸遺跡の須恵器が投げ込まれたものではなかろうか。（長井）

### III 第二次発掘調査

#### 〔1〕発掘調査日誌抄

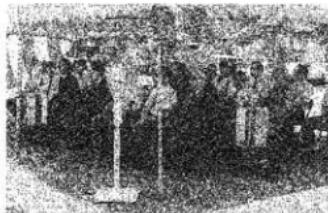
平成6年7月20日（晴） 午前11時より横田遺跡第二次発掘調査地点で、発掘調査に係る神事を実施する。

7月21日（晴） 終日、バックホーにより埋め立てのための客土の除去をおこなう。その厚さは平均1.5mであった。かつての埋め立ての際に、すでに表土層を除去しておいたため、客土を除去して現れた地層面は、第2層上面に相当する。

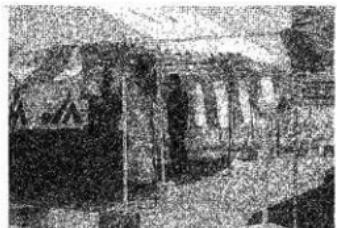
7月22日（晴） 第2層上面の削り出しをおこない、遺構の有無を確認するも、第2層面上にはまったく変化なく、遺構は存在しないことが判明した。そのため、第2層より下部に遺物包含層が存在するのかどうかを確認するため、調査地区的南隅に2m×2m、深さ1mの試掘溝を設定し、発掘をおこなう。

その結果、第2層上面より-70cm付近に黒褐色の遺物包含層が存在することが明らかとなつた。

7月25日（晴） 第2層に相当する厚さ50cmの灰褐色粘土層を、バックホーを用いて除去。調査



発掘調査に先立つ神事



地区南端に東西に走る河川址らしい遺構の存在を確認。中央部においても環状を呈する黒色土による遺構を確認。第2層の除去は南部だけで、北部の第2層の除去は明日にする。

7月26日（晴） 調査地区北部の第2層をバックホーで除去。並行して調査地区南部と西部の湧水を排水する。のち、第3層上面を精査し、遺構の検出に努める。

7月27日（晴） 中央部に所在する環状を呈する遺構の全体像を確認するため、第3層上面の精査をおこなう。その結果、土器片を含む黒色土は半円形に分布していることが判明。遺構面上にシートを被覆。のち、南端を東西に走る河川状遺構の全体プランの検出に務めるが、河川址と断定するまでには至らない。

7月28日（晴） 前日に引き続いて南端の河川址状遺構のプランの検出に努める。並行して湧水による浸水を防ぐため、調査地区の南端と西端に排水溝と貯水溝を掘削。午後から調査地区全域にグリットを設定。グリット間隔は2.5m×2.5mである。

7月29日（晴） 調査地区南部の河川址状遺構のプランの検出を続行。並行してグリットの設定を続行。午後、河川址状遺構の検出に着手する。C2杭付近で、黒褐色土の遺物包含層が南に急激に落ち込むことが判明。その落ち込み法面上から、弥生後期の壺の口縁部が出土。遺構は河川址である可能性が濃厚となった。

7月30日（晴） 南部の河川址の右岸落ち込みの検出をおこなう。A・B・D区の河川址の落ち込み法面の検出をおこなう。

8月1日（晴） D1区とD2区の河川址（以下1号河川址と仮称）の検出に務める。ほぼこの区の発掘を完了。1号河川址は東から西に向かって流れおり、河床面は水平となっていた。

1号河川址のD2杭寄りの河川法面上から西北西に、溝床面が一段高い導水路とみられる人工の溝を検出。1号河川址の河床面との比高は約15cmであった。並行してC1区・C2区の河川址の検出に努める。

8月2日（晴） D2区の発掘を続行。D2区にも1号河川址と別の河川址が遺存することが判明し、これの検出に努める。この河川址を便宜的に2号河川址と呼ぶことにした。午後、2号河川址の発掘を河床面を除いて終了。並行してC1区とC2区の発掘に着手。

8月4日（晴） C1区南部の1号河川址の発掘をおこなう。河床面上20cm～30cmの範囲から弥生土器片出土。河川址右岸は木杭や遺物出土のため、発掘作業は運々として進まず。C1区の1号河川址床面上から、木杭3本からなる「しがらみ」遺構検出。「しがらみ」に伴って砥石が出土。

8月5日（晴） C1区をほぼ完掘。引き続いてC2区の発掘に着手。B1区の1号河川址の発掘。

8月6日（晴） C1区とC2区にわたる2号河川址の全貌が判明。午後、A1区とB1区内の1号河川址の検出をおこなう。

- 8月8日（晴） A1区・A2区とB1区・B2区にわたる1号河川址を完掘。C1区の北部の発掘の結果、この部分で1号河川址から2号河川址が分流していることが判明。
- 8月9日（晴） 1号・2号河川址の河床面の精査を実施。並行して出土遺物の写真撮影と測量を実施。午後より調査地区中央部の半円形を呈する遺構の発掘に着手。
- 8月10日（晴） 午前中に1号・2号河川址の写真撮影。並行してA5区～A8区からB5区～B8区にかけて所在する半円形遺構の検出を続行。
- 8月11日（晴） A8区・A9区とB8区・B9区にわたる遺構の検出を終日おこなう。北部の掘り込み等から河川址の可能性が強く意識される。
- 8月12日（晴） 1号・2号河川址の平面測量を実施。並行してA5区～A7区とB5区～B7区の発掘をおこなう。この結果、中央東部の半円形を呈する遺構は、幅1.2m、深さ45cm前後の蛇行する河川址であることが判明。以後、この河川址を3号河川址と呼ぶことにした。河川址上面から石錐、弥生土器片が若干出土。
- 8月13日（晴） 終日、3号河川址の検出に努める。B7区の3号河川址の蛇行部分の河床面上に、拳大の川石が全面に敷詰められているを検出。
- 8月16日（晴） 終日、3号河川址の検出を続行。
- 8月17日（晴） 1号・2号河川址のC1～C3の地層断面図の作製。のち、セクションベルトの除去。並行して3号河川址の検出をおこなう。
- 8月18日（晴） 3号河川址の北部の検出をおこなう。午前中にはほぼ完掘。午後、1号住居址（A12区）の発掘。表面から弥生土器片出土。午後、内子町の考古学講座の人々の遺跡見学。西岡調査員案内説明。
- 8月19日（晴） 3号河川址出土の遺物の清掃と写真撮影。午後、1号住居址の清掃と3号河川址の平面測量。テント、発掘資材等を第三次発掘調査地区へ搬出する。
- 8月20日（晴） 3号河川址のA8～C8の地層断面図の作製。のち、セクションベルトを除去。並行して3号河川址の北部と住居址の平面測量をおこなう。
- 8月22日（晴） 1号・2号河川址と住居址の断面図の作製。発掘地区全体の写真撮影を残して、現場での作業を一応終了。
- 8月31日（晴） 第二次発掘調査地区の空中写真撮影で、現場での作業完了。

## 〔2〕発掘地区的堆積層序

第二次発掘調査を実施した地区を、今後横田遺跡Ⅱ区と呼ぶことにしたい。Ⅱ区の発掘面積は南北40m、東西10mの400m<sup>2</sup>である。発掘予定地域はかつてのカントリーエレベーター建設の際、地盤整備の目的で第1層の耕作土を除去し、そこに土砂を客土として埋め立てたものである。その埋め立ての厚さは1.2mにも及んでいた。

### 1. 客土層（埋め立て部分）

客土による埋め立て以前の水田面の標高は、5.83m～5.9mであったが、埋め立て後の標高は

6.6mとなっていた。標高6.6mの地表下85cmまでは、石手川以北の高縄半島からの客土である花崗岩の風化した真土であった。茶褐色を呈する花崗岩風化土の下部も、厚さ40cmのアスファルト塊などを含む黒褐色有機質の客土であった。したがって、現地表下1.2mの深さまでは、すべて埋め立てのための客土ということになる。

#### 2. 第1層（暗青灰色粘質土層）

第1層である暗青灰色粘質土層は、平均25cmの厚さで堆積していたが、敷地整備の際にバックホーを使って除去されていた。このことは第一次発掘調査で確認されている。この本来の第1層中には遺物は含まれていなかった。

#### 3. 第2層（灰褐色粘土層）

本来の第2層は灰褐色粘土層で、南部は50~55cm、北部は48cm~50cmの厚さで、上面は凹凸なく平坦となり、安定した堆積状態を示していた。第2層上面は全面を精査したにもかかわらず、遺構とみられるものは検出できなかった。最初は上面に遺構ではないかとみられる黒褐色土が帶状に規則性をもって薄く堆積していたが、発掘の結果、表土層除法の際に走行したバックホーのキャタピラ跡であることが判明した。第2層の堆積は50cm強と厚いが、その中に一部破損した須恵器片が混在しているのが認められた。しかし、遺構に伴ったものではなく、他地域から流されてきて堆積したものである。

#### 4. 第3層（黒灰色粘土層）

ここで取り上げる第3層は、第2層下に堆積している黄褐色粘土層を掘削したり、浸食した後の河川址ないし住居址上に二次的に堆積した黒褐色粘土層である。南部の1号・2号河川址内では1m、中央部の3号河川址内では40cm~60cmの厚さで堆積していた。河川の両岸は氾濫時に滞水したためか、黒灰色粘土層が薄く堆積していた。各々の河床面上には5cm~7cmの厚さで黄褐色土を含む砂礫が堆積していた。河川址や住居址の存在しなかった部分では、この黒褐色粘土層は存在しなかったので、この層が遺物包含層である。

#### 5. 第4層（黄褐色粘土層）

本来は第2層下に堆積している黄褐色粘土層で、遺構の存在する地域以外では、地表から3枚目の地層となる。堆積層の厚さは不明であるが、70cm以上あることは試掘によって確認している。本層中には砂や礫等は全くなく、緻密な粘土であるが、黄褐色を呈するのは赤色オレンジとよばれる火山灰土が混入しているからであろう。本層は極めて安定した堆積状態を示しており、上面は平坦であり凹凸等は存在しなかった。

なお、各遺構上の堆積層序については、各遺構の項目のところで説明を加えたい。

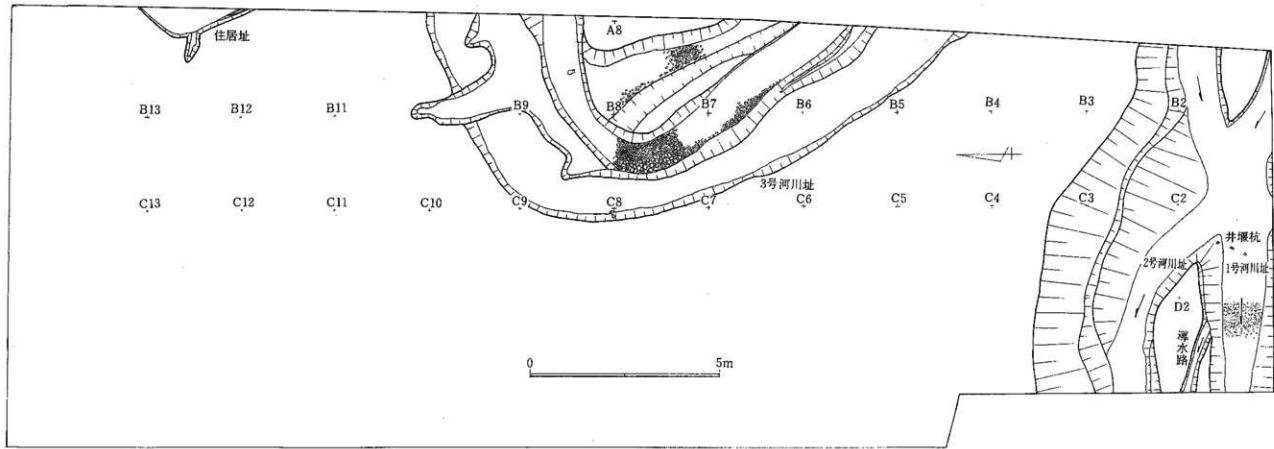


図-12 横田遺跡Ⅱ区平面図

### 〔3〕遺構と遺物

横田遺跡第二次発掘調査地区、すなわちⅡ区で検出した遺構としては、南部で東から西に向かって流れる1号河川址、1号河川址中部から分流して西流する2号河川址、1号河川址から水田への直接の導水路である溝状遺構などがある。1号河川址中には2号河川址へ分流するための井堰（しがらみ）遺構が構築されていた。発掘地区中央部では大きく「L」字状に蛇行する3号河川址を検出した。3号河川址は東から西に向かって流れ、それが南に向かって大きく蛇行している。

3号河川址の北5mでは、住居址を検出したが、そのほとんどは発掘地区外にあり、その極一部がかろうじて発掘地区にかかっていただけである。検出した一部から隅丸方形の堅穴住居址であることが明らかとなったが、柱穴や遺物はほとんど検出されていない。

遺物としては、第2層中から遺構に伴ずに単独で発見された2・3点の須恵器片がある。河川址内からは井堰の杭の一部が発見された。弥生土器などの遺物は河川址内からの出土であり、遺構に伴わずに単独で発見された遺物は、2層中の須恵器片以外にはなかった。

#### 1. 1号河川址（図-13）

発掘地区南端のA1区～A3区からD1区～D3区にかけて検出した河川址のなかの一つである。そのうち1号河川址はA1区～D1区を東から西に向かって流れている。西方は伊予灘であることから、海岸に向かって流れていることになる。ただ、現在の地表面では、横田地区的東を流れる大谷川やⅡ区の西部を流れる小河川は、ともに北流しているが、各水田への水路は東から西に向かって流れている。

検出した1号河川址は南端にあり、左岸は発掘調査地区的範囲外にあるため、その全貌を追求することはできなかった。検出した1号河川址の全長は10mであり、埋め立て前の表土層上面から河床面までの深さは、東部で1.65m、西部で1.7mであった。1号河川址上の堆積層序についてもC～C' とE～E' の地層断面から検討してみたい。第1層や第2層については発掘地区全体の堆積層序で説明しているのでここでは除外したい。

埋め立て前の地表下70cmから堆積する第3層の黒灰色土層は、厚さ43cm～50cmあり、C～C' 線上では南端より北へ2.8mまで、E～E' 線上では南端より北へ6.3mまで堆積していた。この黒灰色粘土層中には弥生土器の細片が遺存していた。なお、E～E' 線上では第2層と第3層の間には、北部に薄く南部に厚い暗褐色粘土層が間層として堆積していた。これは第3層の黒褐色粘土層の影響で、第2層の下層部が変色した結果とみるのが妥当である。第3層の下部のE～E' 線上では8cm～13cmと比較的薄い暗褐色粘土層が堆積し、その下部には皿形状を呈する厚さ35cm、上部幅1.6m、下部幅80cmの黒灰色粘土が堆積していた。この黒灰色粘土の堆積している部分が河川址に該当する。黒灰色粘土層の下部、すなわち基盤層である黄褐色粘土層上には、厚さ5cmの礫層が、その上には厚さ5cmの砂が堆積していた。この上部5cmの黄褐色砂層と、下部の5cmの砂礫層とで河床面を形成している。E～E' 線上では安定した堆積層序をみせているが、C～C' 線上ではそれほど明確ではない。それはC1区の1号河川址内に構築された井堰による滞水

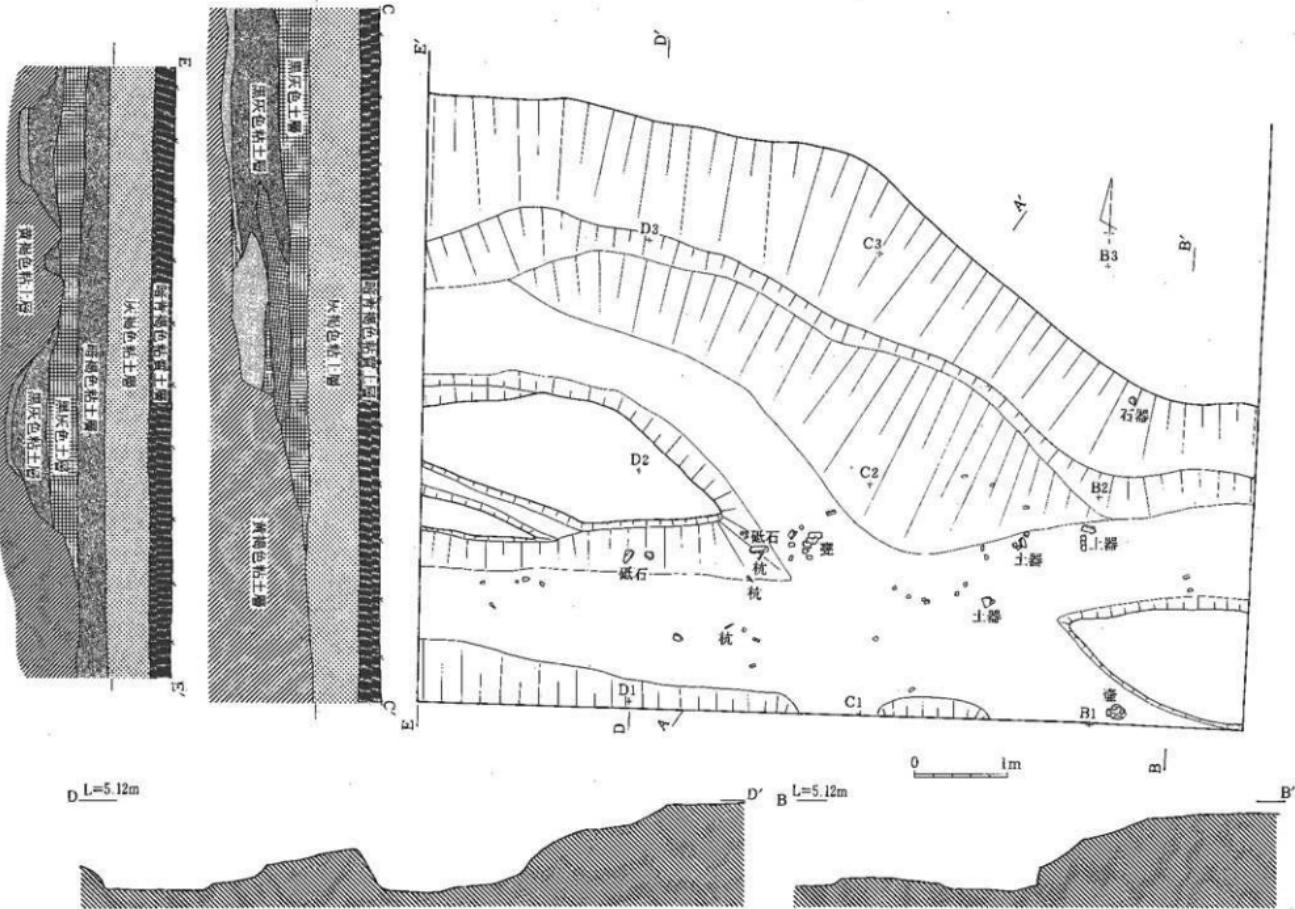


图-13 横田遗址Ⅱ区1号·2号河川址平·断面图

作用で、河岸が浸食されたからにはならない。

以上のようなことから、1号河川址は第3層の黄褐色粘土層を下刻しながら形成された河川と理解される。したがって、河川の存在した時代の生活面は第3層の黄褐色粘土層の上面ということになり、河川の規模もこの面にあらわされている。

第3層中で検出した1号河川址の全長は10mであり、東から西に向かって流れている。A1区～B1区では左岸の状況は不明であるが、通常の河川幅は3.2mと推定される。井堰による貯水の際には最大幅3.6m、洪水時の氾濫等の際は5.2mになったとみられる。A1区ではこれにより中央部に幅1.2m、長さ2mの舟先形の中洲があり、これにより流路が二分されている。中洲の河床面からの比高差は10cmである。B1区では河川幅は1.6mとなり、C1区中央部では1.2m、D1区では1.1mと狭くなっている。深さは東部では83cm、西部では90cmと下流にゆくに従って深くなる傾向を示している。河床面には全面にわたって5cmの厚さで礫が敷詰められていた。これらの礫は親指大から鶏卵大の円礫であり、その石質は和泉砂岩か頁岩である。発掘区域には円礫が存在しないので、他から搬入し、河床面に敷詰めたものである。

C1区で1号河川址から2号河川址が分流し、ややカーブしながらC2区、C3区へと西流している。1号河川址と2号河川址に挟まれた部分は、東部は舟先状となっているが、幅は西になるほど1.8mから2mと広く、かつ、平坦となっている。C1区で1号河川址から2号河川址が分流する1号河川址の川下側の河床面から、流路を斜めに横断する状態で3本の角い加工杭が打ち込まれているのを発見した。これらの木杭は井堰用の杭とみて間違いなく、1号河川址から2号河川址への分水のためのものとみてよい。なお、井堰遺構の下流においては、若干の土砂の堆積の変化が認められたが、これについては井堰遺構のところで別に説明したい。

## 2. 井堰（しがらみ）遺構

C1区の1号河川址から分流する2号河川址への用水を取水するための井堰遺構である。C1区の1号河川址とC2区の2号河川址の間に島状に存在する先端部と、1号河川址の左岸の間の河床面上に、河川を斜断するように3本の加工された角杭が並んで打ち込まれていた。杭の打ち込まれていた1号河川址の川幅は1.2mである。杭の頭部は3本とも腐食して細くなり、尖っていた。南端の1号杭は3cm×3.3cm角で、河床面上28cm、深さ15cmまで、中央の2号杭は3.5cm×3.5cm角で、床面上27cm、深さ22cmまで、北端の3号杭は3cm×3.3cm、床面上36cm、深さ14cmまでそれぞれ打ち込まれていた。1号・2号杭はほぼ垂直であるが、3号杭のみは斜めに打ち込まれていた。杭の間隔は40cmであった。3本の杭はとともに河床中に打ち込まれていたため、加工痕がほぼ原形を留めており、河床の礫層中に打ち込んだためか、先端がさくれ立っていた。

1号杭に東接して土器の細片が床面上20cmから数点発見されたが、直接杭に関係する遺物ではない。3号杭の北に接して長さ24cm、幅10cm、厚さ7cmの輝緑岩製の全面が研磨された砥石が出土した。更にこれに接して1個体分に近い壺の破片が床面上から、砥石の西部の河川法面上からも土器片が出土した。3本の杭の西1mの河床面上から長さ20cm、幅8cm、厚さ6cmの研磨した川石が出土した。これらの土器や研磨された大きな石の出土は、井堰構築のための材料とは考え

られず、水靈信仰に係る遺物と把握すべきであろう。

1号河川址を斜めに横断する状態で発見された3本の杭列の西側、すなわち、下流一帯の河川基盤面上には、礫を5cmの厚さで全面敷詰めていた。礫は和泉砂岩と頁岩が大半を占めていたが、この部分に限って若干ではあるが、緑泥片岩の川石も認められた。この礫層上には平均して3cm～4cmの厚さで、きれいな川砂が堆積していた。特に杭列の下流側では、砂層の上部に約10cmの厚さで黒灰色粘土が堆積し、その上に砂層が、更にその上に黒褐色粘土が堆積し、他の河床面上の土砂堆積のあり方とは若干異なっていた。これは井堰遺構による土砂攪乱の結果であろう。

### 3. 2号河川址（図-13）

2号河川址は1号河川址から分流する河川であり、その分流地点はC1区から北方向にカーブし、D2区からE2区にかけては、舟先形中洲を間に挟んでほぼ1号河川跡に平行して西流している。2号河川址の川幅や深さは、中洲状の平坦面に用水路が開鑿されていることからすると、通常は水面上にあったことを示している。これから分流部分の河川法面上幅は1.5m、河床幅80cm、D2～D3線上では河川法面上幅1m、河床幅65cmとなる。深さは25cmで、1号河川址より約5cmほど河床面のレベルが低くなっている。両端では河川幅は1m、河川法面上幅は1.2m、深さ30cmと、規模が大きく深さを増している。2号河川址の河床面も1号河床面と同様、厚さ5cmの礫層の上部に厚さ5cmの川砂が堆積していた。ただ、1号・2号とも同じであるが、河川上に厚く黒褐色粘土層が堆積していたのは、洪水時等に通常の河床面より+80cmぐらいまで増水していたからであろう。

C1区の1号河川址の河床面上に所在した木杭を用いて構築された井堰遺構は、1号河川址から2号河川址への分水のために設けられたものであることは間違いない。してみると、2号河川址は最初から人工灌漑を目的として開鑿された用水路の可能性が強い。一歩譲って自然の營力によって開鑿された河川址としても、河床に礫が貼地されているので、人の手が加わった用水路であることは明らかである。恐らく、この河川址の西方に続く水田への水路として使用されていたものであろう。

### 4. 漕水路（図-13）

1号河川址と2号河川址に挟まれた東西4m、南北1.8mの島状の小平坦地がある。西部は調査地域外になっているため、どのような広がりをもつかは明らかでないが、上面は平坦になっている。この上面に東西長1.2m、法面上幅32cm～38cm、床面上幅15cm～18cm、深さ28cmの、断面が台形状の溝が掘削されていた。溝床面には河床面上で認められたような礫層は存在しなかった。本溝は1号河川址から水田への取水を目的に掘削された用水路である。1号河川址の河床と本用水路床面との比高差は15cmで、用水路床面が高くなっている。したがって、本用水路の水口に相当する部分の1号河川址内に、井堰を構築して導水していたはずであるが、その取水用の井堰遺構を発掘によって明らかにすることはできなかった。以上のことから1号・2号河川址は、単なる弥生時代後期の自然の河川ではなく、一部人為が加えられた河川址であり、特に河川址の

礫や井堰遺構並びに水田への導水路の掘削等から、河水統制がおこなわれていたことは自明である。

### 5. 1号・2号河川址内の遺物の出土状況

1号・2号河川址上に堆積していた黒灰色粘土層中には、上部から下部に至るまで弥生後期末の土器細片が比較的多く遺存していたが、土器の個体数にすれば数個分であり、細片となって遺存していたため視覚的に多く感じただけである。第3層の黄褐色粘土層を掘り込んだ状態の黒灰色粘土層の周辺上面のD3区で、赤色チャートの石鏃を、B2地点周辺で川石や大きな加工痕のある石器を発見した。しかし、これら石器は河川上面からの出土であるが、河川が埋没したあとに置かれたものか、河川が利用されていた時期のものか明瞭でない。

河川址内の遺物は、上面を除けば黒灰色粘土層中に分布していたが、特にまとまりをもって出土した地点は2~3か所であった。弥生土器片は極めて脆く、外気に触ると風化するほどであった。土器片が集中して出土したのは、1号河川址の右岸法面上と河川址上で、2号河川址内からはほとんど出土しなかった。1号河川址内での出土の集中地点の一つは、河床面上20~30cmの河川中か右岸法面上であり、その二は、貼地の状態で壺が出土した1号河川址の河床面上である。

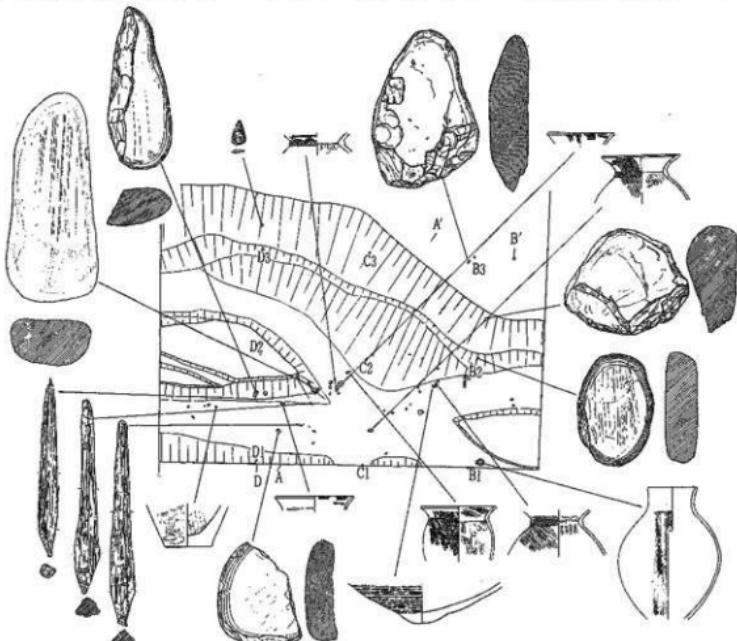


図-14 横田遺跡Ⅱ区1号河川址内の遺物の出土状況

B 2 区では河床の礫層直上から壺の口縁部が出土した。このほかの土器片も、礫上面に貼りついた状態で出土したが、土器片には磨滅痕が認められないので、上流から流されてきたものではない。最も多く土器が出土したのは、1号河川址から2号河川址が分流する部分で、井堰遺構の上流に当たる地域である。特に井堰の3号杭に接する状態で壺が2個体分ほど、河床面上15cmから出土し、それに接して大型砾石が一緒に出土した。

これら石器・土器は井堰遺構の前面にあって、ともに2号河川址の取水口にも相当しており、その出土状態は、水口祭的な水霊信仰のあり方を示しているといつても過言ではない。このほか、井堰遺構の下流からも、河床上10cm~15cmの範囲と、河床面上からまとまりのない土器の細片が出土している。なお、D 1 区の1号河川址の左岸法面上から緑泥片岩の川石が貼りついた状態で出土したが、緑泥片岩の偏平な川石は、大谷川流域にはないことから、伊予灘に面する海岸から搬入されたものとみてよからう。したがって、河川が形成された直後、ないし水口祭り伴ったとみられる遺物は河川床面上からか、井堰遺構周辺から出土したものに限定されるであろう。河川址上の黒灰色粘土層中出土の遺物は、河川内への流れ落ちの状態を示している。なお、大型砾器や石鎚などは、河川法面上よりの出土であるので、河川が活用されていた段階のものか、河川が完全に埋没した後に破棄されたのかを明らかにすることはできなかった。河川埋没はこのことから弥生終末期までには終了していたとみなすべきが妥当であろう。

#### 6. 1号・2号河川址出土の遺物

1号・2号河川址内並びに河川址上から出土した遺物は、すべてが文化遺物であり、自然遺物の出土は皆無であった。文化遺物は大別すると、弥生土器と石器、それに「しがらみ」用の木杭と若干の須恵器片となる。だが、これら遺物すべてが河川址に伴ったものではなく、石器の一部は河川埋没後に属するもの可能性も残っている。

##### (1) 須恵器 (図-15・1~3)

須恵器片・陶器片とも第2層の灰褐色粘土層下部から散発的に出土したもので、遺構に伴つたものではない。恐らく、南東部から流出した粘土中に含まれていたものと推定される。

1は推定口径29cmの広口壺の口縁部である。口縁部は漏斗状に大きく外反し、口縁端を丸くおさめ、口縁下1cmの外面に丸みのある凸帯を1本めぐらしている。色調は外面が青褐色、内面が薄茶褐色を呈し、胎土は精選され、焼成の悪い陶質土器である。叩き等の調整痕は不明であるが、口縁部下の凸帯や胎土等から、他の土器とは識別されるもので、初期須恵器の範疇に属するものとみてよからう。本遺跡周辺でも松前町出作遺跡から初期須恵器が出土しており(註24)、出作遺跡と同じような祭祀的性格を有する遺跡が、横田周辺に存在したことを暗示している。なお、この初期須恵器は伊予市市場南組1号窯址で焼成されたものであろう。2はA 5 区から出土した推定口径10cm、器高3.3cmの須恵器の小型蓋坏である。天井部はヘラ削り状に水平に整形され、口縁部と天井部の境は若干稜をもって垂下し、口唇端は丸くおさめている。色調は青灰色を呈し堅緻である。3はC 4 区出土の坏身で、口径15.5cm、立ち上がり1cm、受部径18cm、深さ4.3cmである。立ち上がりは斜めに大きく内向し、底部は水平となり、ヘラ削りが認められる。2・3の

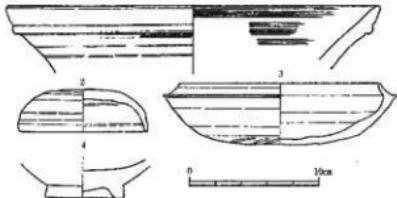


図-15 横田遺跡第二調査区第2層中出土の須恵器

## (2) 弥生土器 (図-16・1~11)

出土した弥生土器は、甕の破片4点と壺の破片7点だけである。

### ①甕

1は口径17.6cm、頸部径13.8cmで、口縁部が「く」字状に曲線的に外反し、最大胴径が上胴部にあるものの、口径よりも若干小さい。外面は粗い縦櫛で、内面は一部斜め櫛と指圧で調整している。色調は茶褐色であるが、上胴部に大きな黒い焦げつきが残存している。胎土中には大きな石英粒や頁岩粒を含み、非常に脆弱である。胎土から当地の粘土を用いて整形、焼成したものである。2は口径18.3cm、頸部径15cmで、口縁部が「く」字状に大きめ外反し、頸部外面を横指ナデ、内面を横刷毛目で調整している。色調は黒褐色で、胎土中には角のある微細な石英粒だけを含んでいるので、他地域からの持ち込みの可能性が強い。

8は底径5.5cm、厚さ1.3cmの甕の底部である。底部付近の外面は縦窓研磨で、底部近くは指圧痕で、内面は範削りで調整している。11は甕の上胴部付近の細片とみられるもので、外面には斜めの、内面には縦の比較的細い櫛目調整が認められる。色調は茶褐色で、胎土中には大きな石英粒だけを含んでいる。

### ②壺

壺は器形から二つに分類が可能である。3は口径15.5cmの壺の口縁部の破片とみられるもので、口縁部は斜めに外反し、外面は一部斜め刷毛目、内面は横刷毛目で調整している。4は口径18.3cm、頸部径12cmで、口縁部が漏斗状に大きく外反し、口唇内面に低く狭い凸帯をもっている。頸部には斜め格子日の刻み目をもつ貼付け凸帯をめぐらし、胴部は大きく張り出している。口縁部外面には同心円状の櫛目文を、胴部には斜めの粗い櫛目文をもっている。内面は口縁部が斜め櫛、胴部は指圧調整している。色調は外面は茶褐色、内面は黒褐色で、胎土中には角のある石英粒や丸みのある赤色チャート、頁岩粒を含んでいる。5は頸部から胴部にかけての破片であるが、器形は4とほぼ同じである。頸部径は12cmで、頸部に斜め格子目の刻み目のある凸帯を貼り付けている。4と相違するのは口縁部外面が単純な斜めの粗い櫛目調整であることと、内面に叩きとみられる調整痕が残る点であろう。色調は茶褐色で、胎土中には石英・頁岩粒と丸みのある赤色チャート粒を含んでいる。6も壺の頸部の破片で、頸部径は13.2cmで、頸部に格子目の刻み目のある貼り付け凸帯をもっている。4・5が菱形の格子目であるのに対し、6は正方形であり、口縁部外

蓋坏並びに坏身は、松山平野のⅢ期1型式（註25）に比定可能で、7世紀前半のものとみられる。4は煉瓦色をする陶器の底部である。底径は6cmで、高さ0.9cmの高台をもっている。焼成は堅緻で、中世、それも戦国時代の壺の底部であろう。備前焼系に属するものと推定される。

面の調整も横と縦刷毛目調整である。色調は外面が茶褐色、内面が暗褐色で、胎土中には微細な角のある石英粒と頁岩粒を含んでいる。

7は口径11.5cm、頸部径10.8cm、推定器高34cm、最大胴径24.5cmの直口壺である。口縁部は直立するものの心もち外反し、最大胴径は胴部中央にあり安定している。底部は欠損し不明である。河川床面に貼地の状態であったためか極めて脆く、外・内面の剥落が激しい。頸部下から底部近くに一部粗い継撚目が残ることから、撚目調整がおこなわれていたとみてよい。色調は赤褐色で、胎土中には角のある石英・片岩・頁岩などを含んでいる。9は壺の底部である。底部は直径3cmほどの円板状となっており、単純な丸底といえず、古墳時代への移行期の底部とすることができる。底部近くの外面は平行叩きで調整しており、4～5や7の壺の底部ではなく、特に胴部の

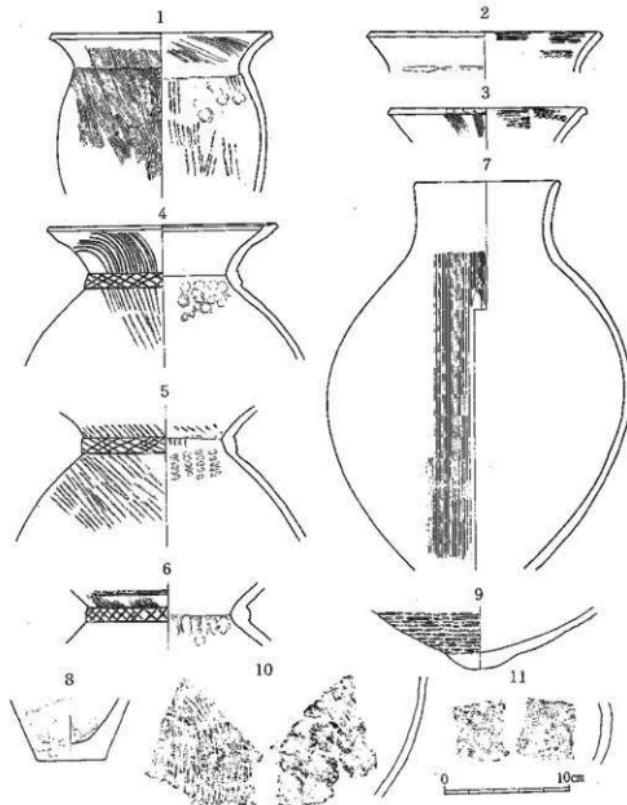


図-16 横田遺跡II区1号河川址出土の弥生土器実測図

張り出しの大きい壺の底部とみられる。色調は灰褐色で黒班があり、胎土中には角のある石英粒を含んでいる。10は壺の下胴部の破片であり、外面には曲線的な櫛目、内面には粗い櫛目をもつている。色調は灰褐色で4~6の壺の下胴部に相当するようである。

以上、土器そのものはそれほど量的に恵まれておらず、高坏や器台・鉢なども出土していない。出土した壺・壺とてわずかである。ただ、これら壺・壺にしてもすべて同じ時期に属するものであり、一括遺物と理解することができる。壺、壺の粗く力強い櫛目調整痕を特徴としながら、叩きが出現していることなどから、松山平野の第V様式第3型式の範疇に入るものとみてよかろう。松山平野の第V様式第3型式の壺には、頸部に刻み目凸帯をもつ複合口縁の壺が、かなりの割合で出土しているが、ここではそれが認められず、変わって頸部に刻み目凸帯をもち、口縁部が漏斗状に大きく外反する壺が多くなる傾向をもっているので、第4型式への移行期のものも一部認められる。これらは、松山平野南部の一つの特色を示しているのかもしれない。

### (3) 石器(図-17・1, 図-18・2~7)

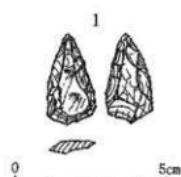


図-17 横田遺跡II区1号河川址出土の石器実測図(1)

1はD3区の2号河川址右岸上から出土した石鎌である。石鎌は長さ3cm、基部幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ4gの凸基式である。両面周縁は小さく剥離調整されているが、両面は平坦である。どちらかというとやや粗雑であり、石質は赤色チャートである。2はB2杭の1号河川址の左岸上面からの出土であり、河川址中からの出土ではない。石器は長さ

14.5cm、幅12.6cm、厚さ6cm、重さ1.4kgで蛤形をし、表面には磨滅した自然礫面が残るが、刃部は両面から階段状に剥離調整されている礫器状石器である。石質は安山岩である。3はB3区の1号河川址法面上から出土したもので、長径13.2cm、短径9.2cm、厚さ3.8cm、重さ614gの長円形の偏平な砂岩の川石である。長軸方向の一端に使用痕が認められるので、一種の叩き石的なものとして使用されたとみてよい。4は長さ8.5cm、幅12.7cm、厚さ4.6cm、重さ1.37kgで、頂頭部は狭く、刃部は広い。刃部以外は磨滅した自然礫面が2と同様そのまま残っており、刃部は両面から大きく剥離され、一見、礫器とみられるもので、安山岩の川石である。2と同様、安山岩は大谷川流域には自然状態下では存在しないものであり、少なくとも中央構造線以南から搬入されたものである。

5はC1区から出土したもので、磨き石の破損品の可能性の強いものである。残存全長12.3cm、残存幅9.7cm、残存厚3.3cm、重さ560gで、半截されており、一面と側面は研磨している。他的一面は削れたままの状態であり、石質は砂岩である。6はD1区の1号河川址の河床面上から出土したものである。長さ19.5cm、幅7.5cm、厚さ4cm、重さ620gで、ほぼ3分の1が縦に破損し、破損面に加工痕は認められない。ただ、幅広い先端部は、片面のみ打撃によって破損している。破損面以外は全面研磨され、光沢を有している。石質は石英粗面岩であるため、利器として使用するにはやや軟質である。砥石として使用したものであろう。7はD1区の1号河川址の河床面に打ち込まれていた、井堰の3号杭の河床面に置かれていた砥石であり、この北部は2号河川への分流地点でもある。砥石は長さ24.8cm、幅は中央部で9.5cm、最大幅は下部で10cm、厚さは5cm~5.5cm、重さ2.1kgである。石質は硬質砂岩で、自然礫面そのものがすでに光沢を有するほど

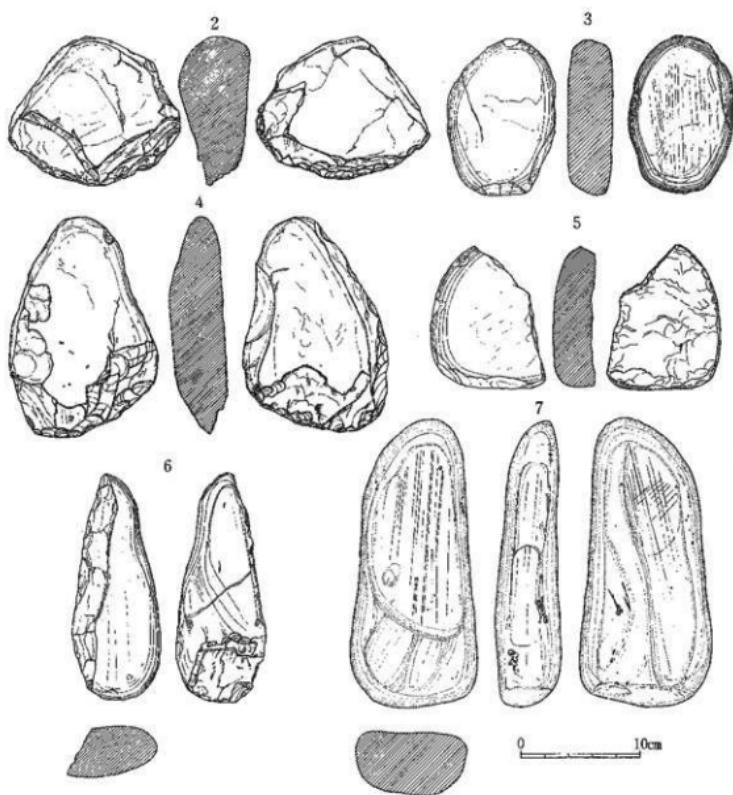


図-18 横田遺跡II区1号河川址出土の石器実測図(2)

磨耗しており、これを砥石として利用している。砥面として4面をそれぞれ使用しているが、主として使用しているのは面積の広い両面であり、その部分は使用のためやや中窪くなり、光沢を有している。砥石の表面には縦に走る使用の際に付いた擦痕が、裏面には斜めに交差する使用痕が顕著に残存しており、鉄器を研ぐための砥石であることは確かである。全面研磨の砥石は、一緒に出土した弥生土器とともに、水靈信仰に関係する祭祀遺物と捉えることも可能であろう。

#### (4) 井堰（しがらみ）用杭（図-19・1～3）

D1区の1号河川址河床面上に、2号河川へ分水するための井堰が設けられていたが、井堰 자체はその痕跡を留めてなく、そのうちの杭が3本だけ遺存していた。遺存状況についてはすでに触れているので、ここでは杭そのものについて説明したい。杭はすべて上部は腐食して小さく

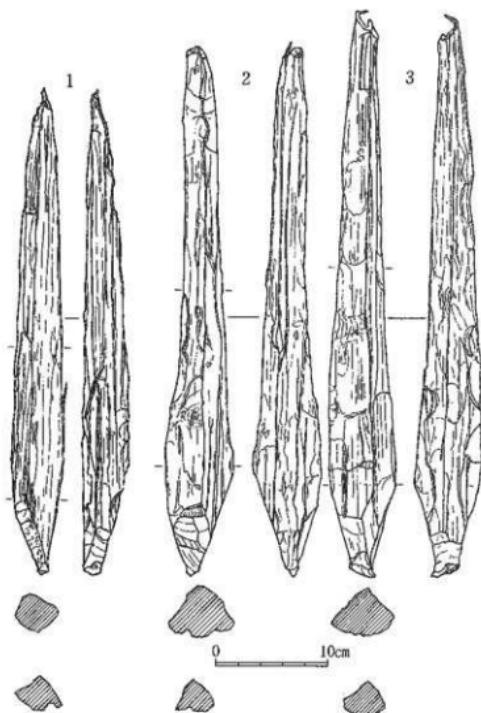


図-19 横田遺跡II区1号河川址井堰遺構  
出土の木杭実測図

### 7. 3号河川址(図-20)

#### (1) 堆積層序と遺構

発掘区域中央東部のA5区～A9区、B5区～B9区にかけて遺存していた河川址である。3号河川址は、A8区からB7区に向かって西流し、B7区中央では直角に蛇行し、A5区に向かって南流している。この河川の流れは、河床面の深さから証明されている。本河川址は更に南流して、1号河川址に合流しているとみられるが、この点については後述したい。3号河川址上の堆積層序については、A～A'、D～D'の地層断面図をみればほぼ明らかである。

表土層はすでに触れたごとく削除されていたが、埋め立て前においては23cm～25cmの厚さの暗青灰色粘土層があり、第2層は灰褐色土層で、その厚さは48cm～50cmあり、安定した堆積状態を示していた。第2層上面は精査したが遺構、遺物等を検出することはできなかつたし、第2層中

なっていたが、河床に打ち込まれていた部分は、原形を保っていた。

1は残存長44cm、最大幅3.5cm×3cm、先端部は4面加工で、先端は尖っている。4面は鋭利な鉄斧で削られている。上部には加工痕は認められず、削ったままの面が残されていた。2は残存長49cm、最大幅は6cm×4.5cmで、断面は正三角形を呈している。先端は鋭利な鉄斧で3面が加工されており、尖っている。上部も断面は三角形で、剥ぎ削った面がそのまま残存している。3は残存長51cm、最大幅は5.8cmで、断面は三角形で、先端は4面加工で、先端は河床面に打ち込まれた際の衝撃で、大きくなされている。上部4面は、部分的に鉄斧で削った跡が薄く認められる。3本の杭の原形は不明であるが、少なくとも1号・2号河川の上面までの高さはあったものとみられる。(長井)

でも認めることはできなかった。第3層は遺物包含層並びに遺構の遺存しない部分は、黄褐色粘土層の基盤層となっていた。この第3層の上面も遺構面以外は平坦で、凹凸等は認められなかつた。恐らく、河川が存在した時期は水田等に利用されていた生活面とみられる。本河川址は、第3層を人為的に掘削ないしは河水が下剥したもので、第3層上面から河床面までの深さは68cm～70cmであった。河川周辺部には黒灰色粘土が薄く、河川址上では43cm、氾濫原上では20cm～33cmの厚さで堆積していた。河川址内ののみは黒灰色粘土層の下部に厚さ10cmの灰褐色粘土層が堆積していたが、下部は川砂を多く含んでいた。黄褐色粘土の河床面上には、茶褐色含礫土層が12cm～15cmの厚さで堆積していた。礫や川石は河床面以外には存在しなかつたので、人為的なものであろう。

今回検出した3号河川址は、全長11.5mで、B7区で約90度の角度で蛇行している。東から西に流れる上流部は5m、蛇行して南流する下流部は6.5mである。西流する上流部の狭い部分は、河床幅50cm、法面上幅83cm、広い部分は河床幅85cm、法面上幅1.1mで、第3層上面からの深さは65cm、河川址内の土手状の上面からの深さ40cm、氾濫原からの深さは38cmである。右岸には二段の浸食による氾濫原状の小段丘面があり、高位の段丘面は河床よりの高さ40cm、低位の段丘面は河床面からの比高が崖状の落ち込みでは17cm、河川近くでは10cmと低くなっている。B10杭付近には、低位の段丘面が高位の段丘面を舌状に浸食している。これは湧水による浸食作用で形成されたものであろう。発掘の際にも湧水が特に多かった地点である。ただ、右岸低位の小段丘は河川が南に大きく蛇行する部分で消滅している。

西流する河川が大きく蛇行する右岸は、流水の攻撃斜面に当たっているが、流れそのものがそれほど激しくなかつたためか、流水による浸食の跡は認められなかつた。ただ、河床面と河岸の法面下部には、この部分だけ握拳大の川石が二段に敷かれたり、法面に貼りつけられていた。他の河床面にも全面礫が堆積していたが、その大きさに明らかな違いがあるので、攻撃面の浸食を防ぐ目的があったとみるのが最も妥当のようである。

蛇行する部分の外側には、河川に向かってゆるやかに傾斜するミニチュア氾濫原が帯状に広がっている。幅は蛇行面近くでは90cm～100cm、南部で150cmと拡大している。蛇行する内側にも幅広い帯状のミニチュア氾濫原があり、その中央部が細い溝状となっている。特にミニチュア氾濫原の北部には、河床面と同様、川礫が全面に敷詰められていたので、しばしば氾濫を繰り返していたのかもしれない。ミニチュア氾濫原の東部は黄褐色粘土からなる台地状となり、その上面は平坦となっているが、第3層の黄褐色粘土層の上面と比較すると25cm低くなり、河床面よりの比高は35cmである。蛇行する周辺の西岸に帯状の広いミニチュア氾濫原状の小段丘が形成されているのは、流れがそれほどなく、滲水する場合が多かった結果ではなかろうか。滲水すると両岸の粘土層の剥落が起こり、河川幅が薄く広く拡張したものと推定される。

3号河川址は、更に東南部へと流出し、A1区～A2区の東部で1号河川址に合流しているとみるのが妥当な考え方である。しかし、河川の深さが1号河川址に比較すると、一段と浅いことから、1号河川址の上流であるとすることは無理であり、合流する一支流と理解すべきであろう。

第一次調査で検出された小河川址との関係は全く考えられない。それはその間に1号河川が流

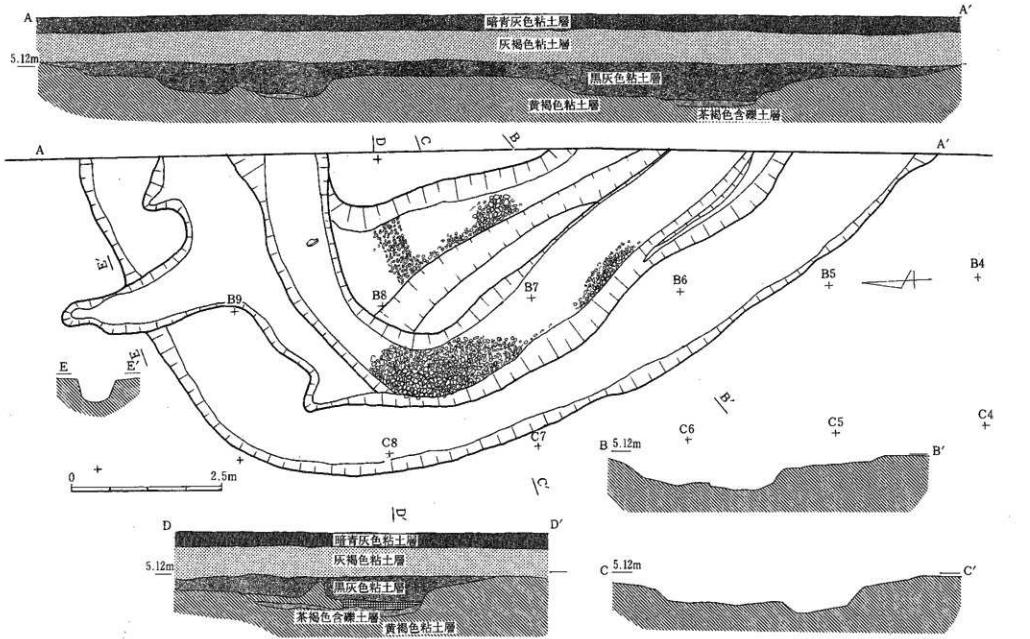


图-20 横田遺跡II区3号河川址平・断面図・堆積層序図

れているからである。恐らく、第一次発掘調査で検出した小河川址は、1号河川址に流入した別の一支流と理解すべきであろう。このように考えると、この当時の河川は自然発生的で、小さく蛇行する河川が多かったようである。しかし、その自然発生的河川を、のち水稻耕作の用水路とするために、手を入れて改修したり、河床面に礫を敷詰めるような改修工事をし、河水の下刻作用を防ぎ、井堰や水田への導水路を設けたりして使用している。

## (2) 3号河川址内の遺物の出土状況

3号河川址内からの出土遺物は、1号河川址に比較してもその量は少ない。出土遺物はすべて文化遺物であり、自然遺物は皆無であった。

土器は弥生土器であるが、すべて細片であり、復元可能な土器片は出土していない。土器片は南流する河川の法面上端と、東部の河川中央部の河川上面に相当する部分、更に上流左岸の法面上から、それぞれ底部片が出土している。蛇行面の少し下流の中央部でも、土器底部が出土した。これらは河床面上40cm~48cm、すなわち河川が埋没した後の河川址上からの出土となる。したがって、直接河川に伴つたものとはいえない。これら土器は特に脆く、凝固材で固めたにもかかわらず原形のまま取り出すことができないほど脆弱であった。

石器は7点出土したが、磨き石と石錐状石器以外は石錐であった。磨き石はA8区の河床面からの出土であり、この下流50cmでは2個の川石が発見された。河川が大きく蛇行する部分の河床の礫群中にも1個石錐が遺存していた。この石錐だけは河床に礫を敷詰めた時に、一緒に埋めたのであろう。それゆえ、河川の改修時期のものであり、他の石錐とは明らかにその所属時期が異なる。石錐の形態や石質も他のものとは趣を異にしている。蛇行する部分の東側の小氾濫原に相当する部分の河床面上60cmからも、有溝石錐が1点出土し、南流する下流の河川上面から、2個の石錐と1個の円礫が出土した。これらも河床面上40cm~46cmで、河川埋没後に破棄されたものであろう。

以上のように、河川に伴つたといえる遺物は、河床礫中に混在していた石錐と磨き石だけであ

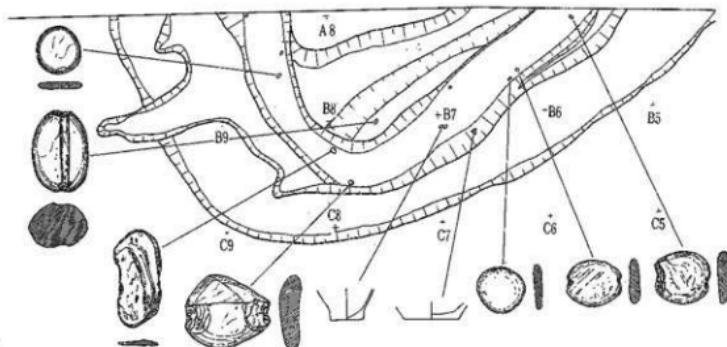


図-21 横田遺跡Ⅱ区 3号河川址内の遺物の出土状況

り、他の土器や石錐は河川上面の出土であることから、河川が埋没したあとの遺物ということになろう。1号河川址の法面付近から出土した石錐や砾器状石器と同じように論ずることはできない。これら遺物が河川埋没後に、河川址に全く関係なしに破棄されたとするならば、河川址上以外でも出土するはずであるが、それが全く認められてないので、河川址に関係ないとするには若干の杞憂を抱くし、1号河川址内の遺物の出土状況とも明らかに相違する点がみられる。

### (3) 3号河川址出土の遺物

出土遺物としては、若干の弥生土器片と石器があるが、その量は極めて少ない。土器は器形をうかがえるものはない。石器には石錐・石庵丁状石器・磨き石などがある。

#### ①弥生土器（図-22・1～2）

口縁部や文様をもつ土器片は全く出土していない。胴部に相当する土器は存在したが、発掘中に溶解してしまい取り出すこともできなかった。わずかに底部が2点ほど取り出せただけである。したがって、土器片からその型式を読み取ることは不可能に近い。ただ、1・2の底部は平底であるので、後期中葉を下るものではなく、どちらかというと中期後半の土器の可能性が考えられる。

#### ②石器（図-23・1～6）

出土した石器は、石錐が4個、コマ状石器が1個、それに円礫器が1個である。

1は長さ6.5cm、幅6cm、厚さ1.4cm、重さ87gの円形で偏平な石錐である。両端に両面から剥離による抉りがみられる。石質は緑泥片岩である。2は長さ6.4cm、幅5.1cm、厚さ1.2cm、重さ70gの長円形で偏平な石錐である。両端に両面からの簡単な剥離による抉りがみられるが、その抉りは1に比較すると一段と小さい。石質は緑泥片岩である。3は長さ9.4cm、幅6.9cm、厚さ5cm、重さ388gの羽形をした有溝石錐である。両端に小さな抉入が認められるが、それは両面に並行する溝のためである。溝は幅0.9cm～1cm、深さ0.25cmで、全面研磨されている。石質は砂岩であり、1・2の石錐に比べて大形品で重い。4は長さ9.7cm、幅8.8cm、厚さ2.3cm、重さ260gの無花果形をした川石利用の石錐で、両端が両面から大きく剥離され抉入している。石質は石英板岩である。両端に抉りをもつ点では1・2の石錐と共通性を有するが、石質の違いや大きさの違いが認められる。加えて4の石錐は3号河川址の河床面上に貼地されていた砾中にあったもので、出土状況も他の石錐とは違いがある。

5は直徑5.5cm、厚さ0.9cm、重さ47gの偏平な円板状の石器で、1～3の石錐と同一レベルからの出土である。加工痕とみられるものは認められないが、何んらかのために使用された石器とみられるが、石錐の原料かもしれない。石質は表面が特に風化の激しい緑泥片岩である。6は長さ11.5cm、幅5.5cm、厚さ0.7cm、重さ79gの偏平な緑泥片岩である。中央部の両側に抉入が認められ、幅は4.5cmと狭くなっている。先端部に加工痕や使用痕が認められないので、石錐としての用途は考えられず、菰編み用のコマとしておきたい。

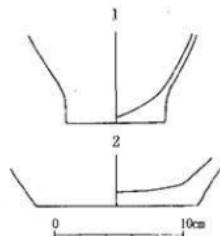


図-22 H区 3号河川址  
出土の弥生土器実測図

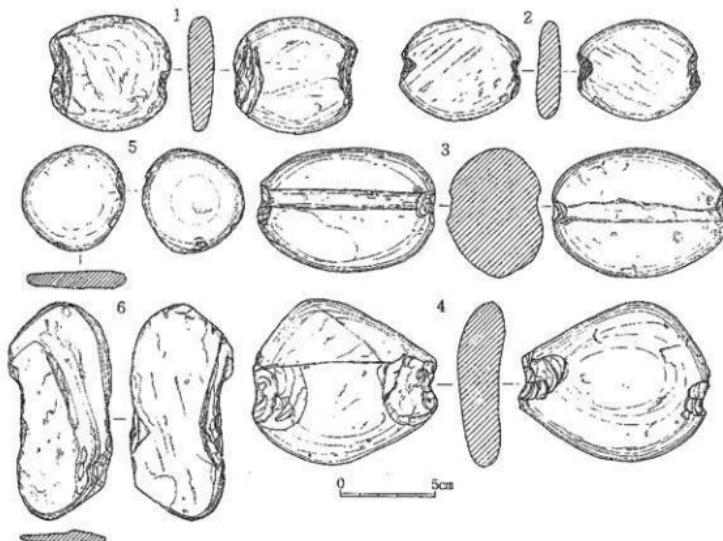
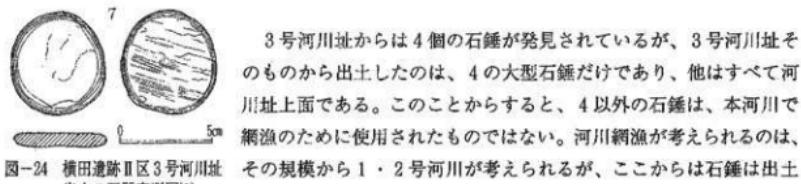


図-23 横田遺跡II区3号河川址出土の石器実測図(1)



3号河川址からは4個の石錐が発見されているが、3号河川址そのものから出土したのは、4の大型石錐だけであり、他はすべて河川上面である。このことからすると、4以外の石錐は、本河川で網漁のために使用されたものではない。河川網漁が考えられるのは、  
図-24 横田遺跡II区3号河川址 その規模から1・2号河川が考えられるが、ここからは石錐は出土していない。これら石錐がすべて河川漁業でなく、海での網漁ではといわれているが、その可能性は大である。同じような石錐が隣接する太郎丸や片山遺跡(註26)、それに伊予市松本新池・八反地池遺跡などから出土していることからもそれはいえる。ただ、大型卵形の有溝石錐は行道山遺跡からも数個発見されており、すべてが海での網漁とすべきではなく、重信川等での河川網漁に利用されたことを否定することはできない。両端に抉りのある石錐と、有溝石錐が同一遺跡で同一時期に使用されていたことは間違いないが、同一漁法でおこなわれていたかどうかは明らかでない。

#### 8. 住居址 (図-25)

3号河川址の北5mのA12区から住居址の一部を検出した。住居址は本来の第3層黄褐色粘土層を掘り込んで構築しており、隅丸方形の堅穴式住居の一部分で、掘り込みの深さは8cmと浅い。西側掘り込み長は210cm、北側掘り込み長は130cmで、隅丸部分に造り出し状の掘り込みをもって

いるが、これは浸食作用によるものであろう。精査したが柱穴は認められなかった。西側掘り込み下には幅10cm、深さ7cmの周溝が認められた。住居址内の床面上から4点の弥生土器の細片が発見されたが、器形や文様をうかがえるものはなかった。住居址の大部分は発掘調査地域外の東部に遺存しているものと想像される。ただ、1号・2号河川址や、河川址から発見された遺物等は、本住居址と密接な関係を有している可能性が考えられる。(西岡)

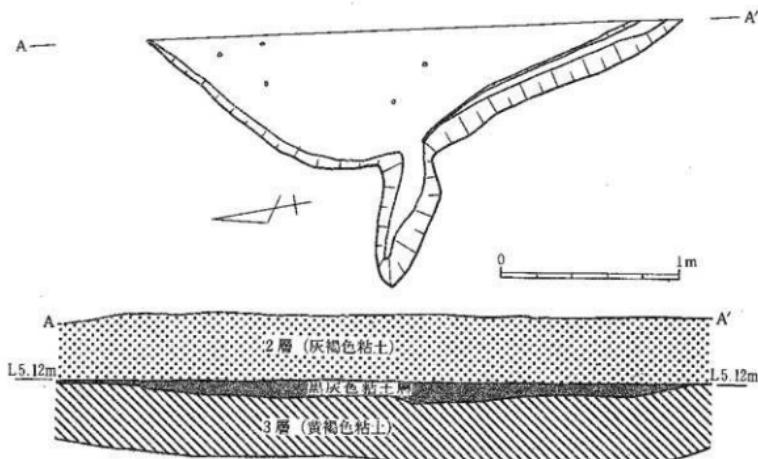


図-25 横田遺跡II区3号河川址平・断面図

## IV 総括

横田遺跡第二次発掘調査の結果、明らかとなった遺構は1号・2号・3号河川址と1号河川址に伴う井堰（しがらみ）、導水路の各遺構、それに隅丸方形の竪穴式住居址の一部である。1号～3号河川址は、単なる自然の河川址ではなく、人為的要素を多分にもつた河川址であり、稻作農耕用の灌漑用水路として利用されていたことが明らかとなった。

1号河川址そのものは、はじめから人為的開鑿によるものかどうかは明らかにすることはできなかったが、自然の當力による浸食作用によって形成されたものとしても、河床面上に砂利を敷き詰めていることは、河川改修や河水統制をおこなっていたことをあらわしている。更に1号河川址から分流する2号河川址は、1号河川址中に設けられた“しがらみ”（井堰）からして、人為的に開鑿された用水路とみてよい。1号・2号河川址の河床は水平となっている点もより人為的作用が働いていることを示している。1号河川址からの導水溝は、水田への用水路、即ち水口

であることを証明しているが、これらから考えられることは、この河川の水を利用していた水田は、規格化されたものではなく、不規則な自然発生的水田であったとみてよい。

さて、これら河川址で、河川改修や河水統制が行われたことは明らかであるが、その時代・時期が問題となる。1号・2号河川址並びに水口が掘削ないし改修された時期と、“しがらみ”が設置された時期には、それほどの違いはないと思われる。特に1号河川址の河床面上に置かれた状態で、弥生後期後半の壺や甕、更に砥石が出土したことから、弥生時代後期後半を遡ることはほんあるまい。河川址上の黒灰色粘土層中に遊離した状態で遺存していた土器片も、河床面から出土した土器とはそれほどの時期差が認められないが、直接河川址に関係する遺物ではない。とすると、これらは上流から流されたものが堆積したものとみなければならない。3号河川址中から流された可能性が考えられないとするならば、第一次発掘調査地区の河川址中に遺存していた、弥生後期後半から終末期の土器と関係があるのかもしれない。特に河床面に貼地の状態で出土する土器が、松山平野の第V様式第3型式であることから、これら河川が主として活用されていたのは弥生後期、それも後半の時期のものとみることもあるがち幸運付会とはいえないからう。

愛媛県内の発掘調査で、単なる溝ではなく、河川址と断定できるものが発見されたのは、縄文晩期の松山市船ヶ谷遺跡（註27）と今治市州尾遺跡（註28）、弥生後期の今治市宮ノ内遺跡（註29）や伊予市下三谷西原遺跡（註30）、弥生後期末から古墳時代初頭にかけての松山市宮前川遺跡（註31）や本井遺跡のI区（註32）、古墳時代前期の松山市古照遺跡（註33）などである。弥生時代の井堰である“しがらみ”は県内でははじめての発見であり、かつ確認された最古の井堰である。古墳時代の古照遺跡の3基の井堰の先駆をなすものが本井堰の“しがらみ”である。すでに河水統制がおこなわれ、護岸を補強することは縄文晩期の船ヶ谷遺跡でも明らかになっており、稻作開始とともに設置されたものであろう。なお、本遺跡周辺では伊予市下三谷西原からも弥生後期の河川址が発見されている。

1・2号河川址は、河川幅、深さからかなりの流量があったものとみられる。他方、一次調査で検出された小河川址や3号河川址は、1・2号河川址に流入していたものであろうし、その流路が複雑に蛇行していることは、これら河川がその役目を果たしていた時代は、土地の傾斜がほとんどなく、平坦な低湿地であったことを証明している。その後、1・2号河川址が埋没するほどの洪水があり、上流からの土砂が厚く堆積したものであろう。通常では表土下の第2層上面に遺構が遺存するが、本



図-26 愛媛県内の縄文～古墳時代の河川址発見の遺跡

遺跡では深さ80cm以下の第3層中に遺構・遺物が存在することから、かなりの土砂の堆積があったとみられる。1・2号河川址や3号河川址上から遺物が出土したのは、1号住居址で生活していた人々に關係する遺物とみてよいのではなかろうか。一次調査で出土した後期後半の土器と併せ考えると、小河川周辺に数棟の住居跡の存在が推定される。

第三次調査で明らかとなったⅢ区の弥生前期の遺構面と、Ⅱ区の弥生後期後半の遺構面が同じ地層にあることは、急激な土砂堆積は弥生後期末以降と捉えるべきである。出土遺物でやや問題となるのは、1号河川の右岸法面上から出土した安山岩製の礫器状大型石器である。三次調査の遺構中から同じ石の剥片が出土していることから、これら大型石器の所属の時期は弥生後期ではなく、弥生前期かもしれない。

石錘のうち卵形を呈する有溝石錘は、松山平野南部から北部にかけてかなりまとまって発見されているが、そのいずれもが砂岩である。同時に出土する偏平な緑泥片岩の海石による両端を打ち欠いた石錘と共に伴している。本遺跡周辺の平松・太郎丸・行道山の各遺跡でも同じである。これら有溝石錘は本遺跡と太郎丸遺跡以外は、弥生中期後半の遺跡から出土している。同じ遺跡からの出土とすると、その製作手法に大きな違いを認めなければならない。この違いが何に起因しているのか、文化ないし文化圏の違いによるのか、網漁の方法の違いによるのか、はたまた特別な意味をもつのか等、将来解明しなければなるまい。いずれにせよ、松山平野では古墳時代前半になると古照遺跡のような大規模な井堰が作られ、稻作灌溉がおこなわれるようになるが、さしすめ、1号河川跡の井堰の大規模になったのが古照遺跡の井堰であろう。

弥生時代の明確な“しがらみ”遺構が発見されたのは愛媛県内でははじめてであるが、本遺跡のような低湿地においても、河水統制がおこなわれていたことが判明したのは、弥生時代の稻作農耕を考えるうえで重要な資料を提供してくれたといえる。

河水統制による分水もさることながら、“しがらみ”遺構に土器や砥石の供獻がみられることは、水口信仰がすでに弥生後期からおこなわれていたことをあらわしており、低湿地においても稻作用水がいかに重要であったかを示している。ただ、水口信仰は水靈信仰のみならず、稻の豊饒を祈念する祭祀形態を具現しているようであり、古墳中期に盛行する水靈信仰の場である出作遺跡の素形を、そこに見出すことができるようである。

(西岡・長井)

- 註1 長井數秋「伊豫市の先史時代」（『伊豫市の歴史文化』28号）1993
- 2 西岡信次が平成4年に猿ヶ谷古墳の填丘上で発見したナイフ型石器である。現在は四国横断自動車道建設のため、古墳の調査を実施しただけで破壊。
- 3 愛媛県埋蔵文化財調査センター編『県道「伊予＝川内線」開通埋蔵文化財発掘調査報告書・平松遺跡』（愛媛県埋蔵文化財調査センター）1993
- 4 谷若倫郎・須藤數子・西川真美『上三谷古墳群』（愛媛県埋蔵文化財調査センター）1987
- 5 露光晴『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』（伊豫市教育委員会）1993
- 6 西田栄「伊予のやよい」（『愛媛の文化』第13号）1973
- 7 註3と同じ
- 8 註5と同じ
- 9 註4と同じ
- 10 山本雅夫「伊豫市の弥生時代の文化」（『愛媛の文化』第13号）1973  
長井數秋「行道山遺跡」（『愛媛県史』考古資料編）1966
- 11 伊豫市教育委員会編『伊豫市遺跡台帳』（伊豫市教育委員会）1993
- 12 相田則美「宍道古墳群についての覚書」（『遺跡』第6号）1970  
長井・入間・宮内「伊豫市宍道前方後円墳について」（『百跡』創刊号）（松山工業高等学校郷土研究クラブ）1984
- 13 長井數秋『愛媛の考古学』（愛媛文化復古）1994
- 14 長井數秋・西岡信次『下三谷西原・ケリヤ遺跡』（伊豫市教育委員会）1987
- 15 松前町教育委員会編『出作遺跡I』（松前町教育委員会）1993
- 16 後藤守一「子持勾玉の新例」（『考古学雑誌』23の7）1932
- 17 註5と同じ
- 18 註5と同じ
- 19 長井數秋・杉本一正「伊豫市八反地遺跡」「伊豫市内台遺跡」（『上吾川・森埋蔵文化財調査報告書』）（伊豫市教育委員会）  
1991
- 20 註3と同じ
- 21 長井數秋「伊豫市市場南組1号窓跡出土の須恵器」（『ソーシャル・リサーチ』第20号）1994
- 22 長井數秋・杉本一正「伊豫園上吾川吉泉庵寺」（『上吾川・森埋蔵文化財調査報告書』）（伊豫市教育委員会）1991
- 23 梅木謙一・宮内慎一「朝英澤遺跡・辻町遺跡」（松山市埋蔵文化財センター）1992
- 24 長井數秋「慶雲寺遺跡」（『愛媛県史』資料編・考古）1986
- 25 長井數秋「松山平野の須恵器編年」（『愛媛考古学』12号）1992
- 26 註5と同じ
- 27 長井數秋・米倉聰・八木武弘「松山市船ヶ谷遺跡の調査」（『考古学ジャーナル』No.28 112）1975
- 28 愛媛県埋蔵文化財調査センター「中寺州尾」（『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書』II）1989
- 29 八木武弘『宮ノ内遺跡』（今治市教育委員会）1976
- 30 註14と同じ
- 31 野口光比古他『宮前川遺跡』（愛媛県埋蔵文化財調査センター）1986
- 32 杉本一正「横田遺跡」（松前町教育委員会）1992
- 33 黒崎直他『古照遺跡発掘調査報告書』（松山市教育委員会）1974

